

續 頼 嬭

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和八年十一月一日發行（一月一回）

元錄忠臣藏

交

第八年・第十一號

豊國画



本瑪瑙帶留 オリジナル

進呈!



パニング

クリーム



- 一、五十銭瓶の空函へ住所氏名を書いて本舗景品係へ郵送下さい(二十五銭の空函は二個)御買上げの店へ出されてもよろし。
 - 二、二十人様に一人當籤等外にはカオル(十銭包)全部進呈
 - 三、御一人で何個でもお出し下さい多い程當籤率がよろし。
 - 四、抽籤昭和九年二月末日迄に數回施行し其都度新聞紙上に發表します
 - 五、抽籤に依らない最高特典(二十五銭なれば十二個)五十銭の空函六個を取りまとめ本舗に御送りなれば抽籤無く帶進呈します
- 原料香水カオル本舗株式會社
衛生口錠カオル本舗株式會社

安藤井筒堂
東京市日本橋區水天宮前

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽

喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を!

道頓堀戎ばし北詰

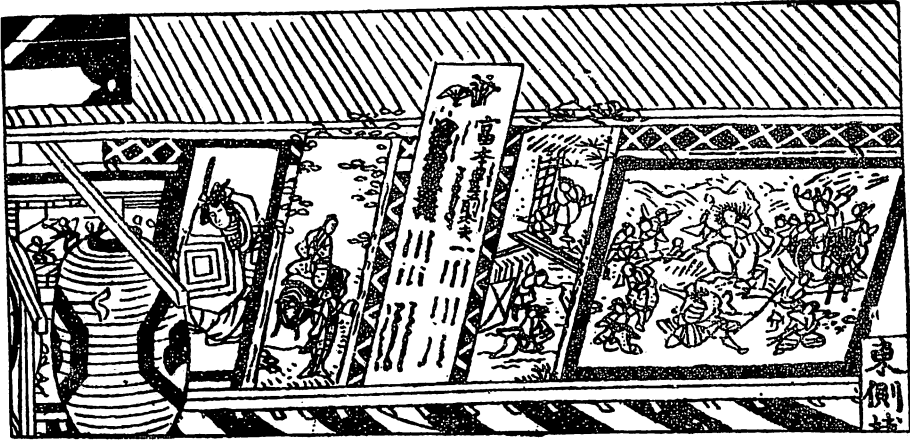
支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店

(心齋橋筋二丁目)





東側

◆ 道 頓 堀 ・ 昭和八年十一月號 ・ 第八十六輯 ◆

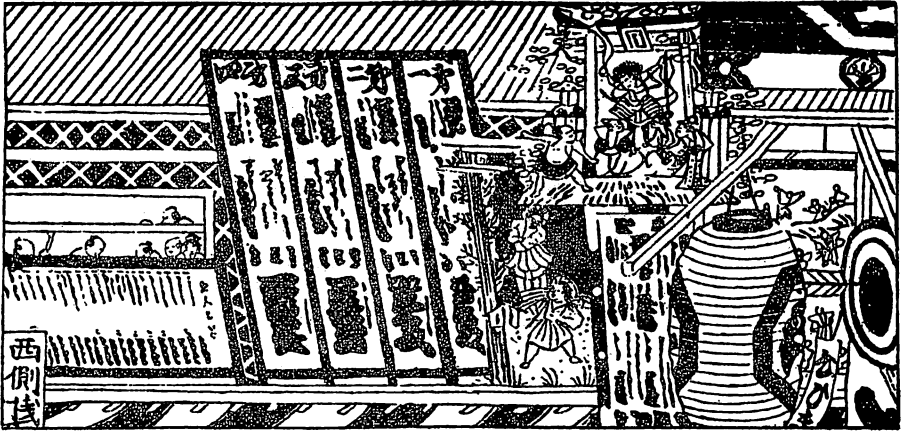
★ 繪 口 ★

○歌舞伎座◇各派大合同◇新樹◇井上の鐵馬◇お夏清十郎◇水谷のお夏、龜藏の清十郎、嘉久子のお龜◇酒中日記◇井上の校長、藤村の三輪◇魚河岸の朝◇井上の魚友、水谷の俊子、柳の保之助、藤村の源助◇樺姫◇水谷のマルゲリット、田之助のアルマン、柳の父◇中座◇名妓の所作事◇鶴の巢籠、京人形野崎村、さしま、執着獅子、宗清、かされ、毛谷村、紀文◇松竹家庭劇◇裁かれる母◇石河の咲子、小織の檢事、高田の瀬戸、元安の傳公◇浪花座◇壽三郎の内藏之助、橋三郎の淡路守、壽之助の伊達左京亮、瑤藏の澤右衛門、扇雀の新左衛門と内匠頭、延太郎の主税、鷹正の上野介◇南座◇新國劇◇井伊大老の死◇辰己の大老、二葉の昌子、長島のお静◇警察官◇島田の伊丹巡查、辰己の橋本巡查、長島の田鶴子、野村の署長、◇新藏兄弟◇二葉のお浪、島田の新藏、辰己の新十郎◇文學座◇廓文章◇紋十郎の夕霧、扇太郎の伊左衛門◇大妻寺◇榮三の治郎右衛門、紋太郎の新七

★ 表 紙
忠臣藏古版畫……………
井上正夫の八雲小學校長(スケッチ)…………… (二)

劇 壇 往 來

忠臣藏評判……………西尾福三郎 (三)
歌舞伎座夜の部を観る……………森 かのほ (四)
新派の腕さ味……………高 谷 伸 (七)
十月の新國劇……………山口 廣 一 (九)
非常時を突破した新國劇……………豊岡佐一郎 (一〇)
取り去られた鐵扉……………中井 浩 水 (一三)
戻り橋の綱に世々義の至藝……………新谷 誠 水 (一四)



◆阪東壽三郎を語る◆

.....
 ファンの聲.....木谷蓬吟(二六)
 缺點克服を.....坪内士行(二六)
 私を観た阪東壽三郎丈.....行友李風(二七)
 阪東壽三郎に寄す.....食満南北(二八)
 壽三郎に寄す.....松本憲逸(二九)

新? 舊? 八重子の立場.....水谷竹紫(三〇)

八重子打さげばなし.....水谷八重子(三一)

小説 受難の一夜.....柳永二郎(三二)

芝居十句.....入江來布(三三)

あな手本提灯暗.....四海波(三四)

續街頭で拾った話.....曾我廼家十吾(三五)

「青春街」と花賣娘.....門脇陽一郎(三六)

◆劇壇ニュース.....(三七)

★編輯後記.....田中滿彦(三三)

天下の銘酒

シ
ラ
ユ
キ

白雪

ま
く
し
に

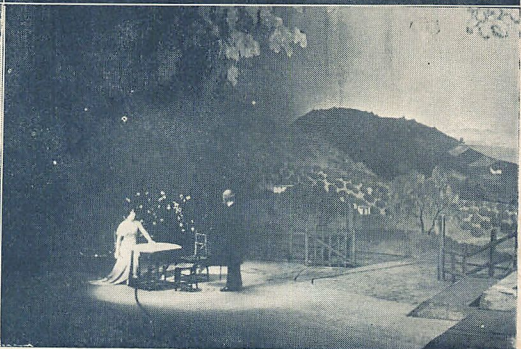
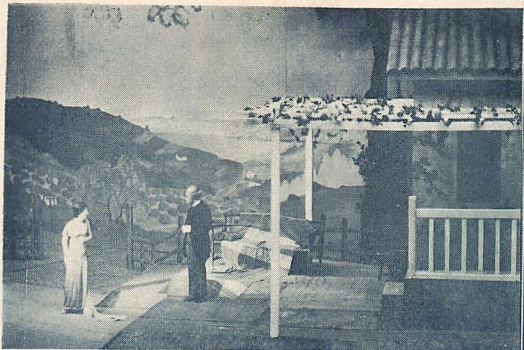
か
さ
る

白雪のあじ



摂津・伊丹・灘

伊丹小西本店

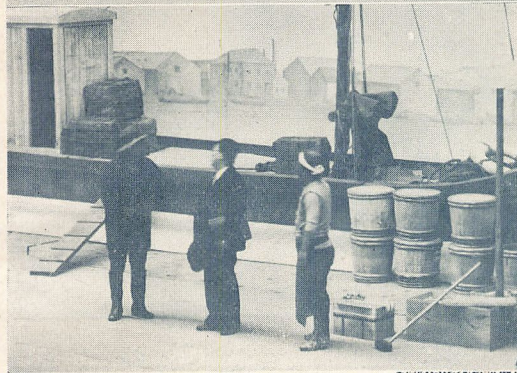


子重八谷水 (姫椿)	トツリゲルマ
助之田村澤	ンアルア
郎二永 柳	父のンマルア

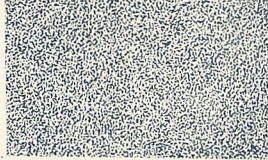


「椿
姫」

劇 同 合 大 派 各
座 伎 舞 歌 の 月 一 十



◇ 座伎舞歌の月一十 ◇



◇ 劇同合大派各 ◇



魚 保 源 林
 之 俊
 女 子 助 田

井 上 正 夫
 水 谷 八 重 子
 柳 永 二 郎
 藤 村 秀 夫
 梅 田 重 朝

『魚河岸の朝』



◇ 各派大合同劇 ◇

◇ 十一月の歌舞伎座 ◇

『 樹 新 』

夫正上井 馬鐵川香



『お夏清十郎』

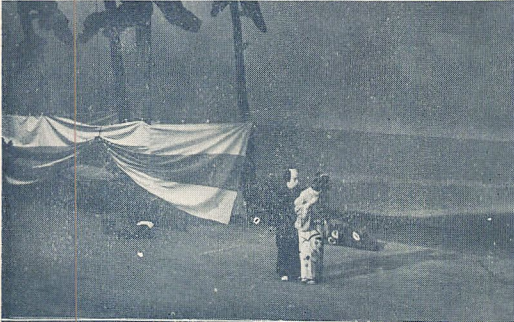
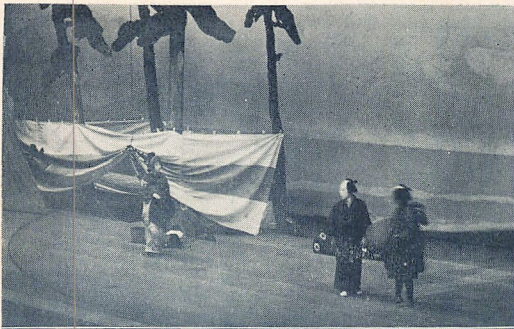
娘お夏 水谷八重子
手代清十郎 市村 龜藏

下女お龜

村田嘉久子

『酒 中 日 記』

八雲小學校長 井上正夫
三輪元太郎 藤村秀夫





「裁かれる母」

早島 咲子
瀬戸 信男
検事

石河 桂一
小織 桂一
小織 桂一
郎 薫

◆松竹家庭劇◆

◆十一月の中座◆

瀬戸 信一郎
舶來 小僧傳公

高田 元安
豊 亘



アングロス井ス

ミルクチヨコレート

ヨーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

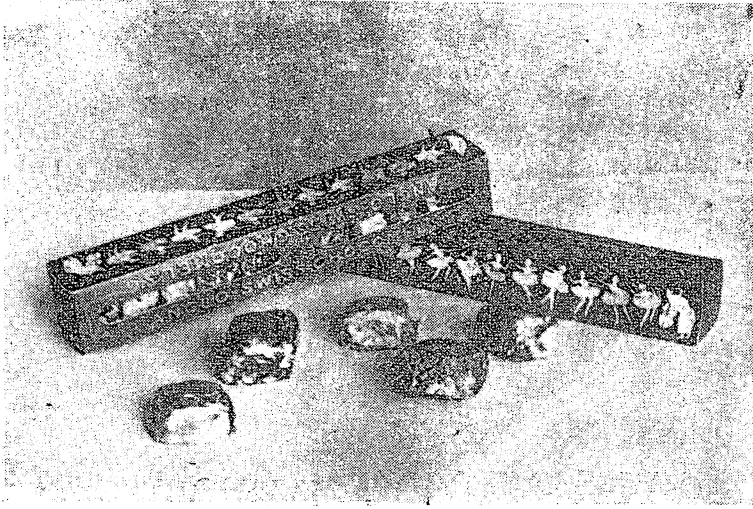
發賣元

株式會社

横山商店

電話東 (94)

四二一
六〇六
四一六
九三一
九三

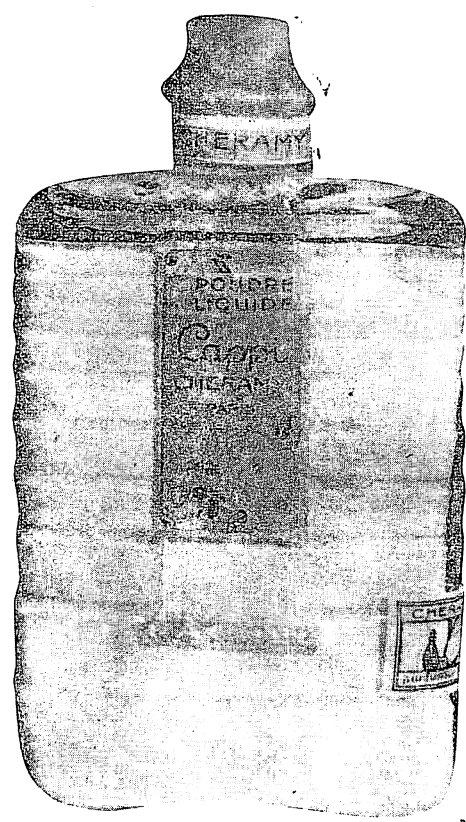


“Cappi”
POUDRE LIQUIDE

新入荷!! 新時代の寵兒
待望の

カツピ
ー
水
白
粉

濃肌白
肌
色色色



¥ 1.35

CHERAMY. PARIS.

佛國巴里セラミー化粧品會社

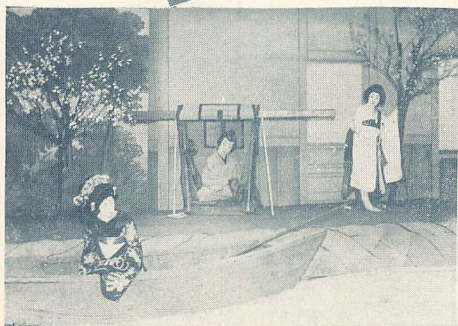
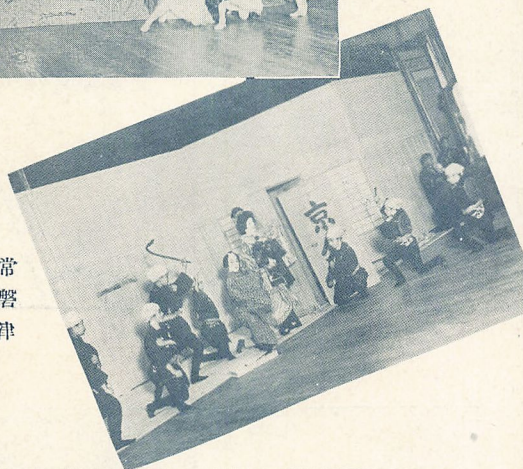
地唄
「鶴の巢籠」



◇ 南地名妓の所作事 ◇ 十月下旬の中座 ◇

右端上より「執着獅子」「宗清」「かさね」「毛谷村」

常磐津
「京人形」

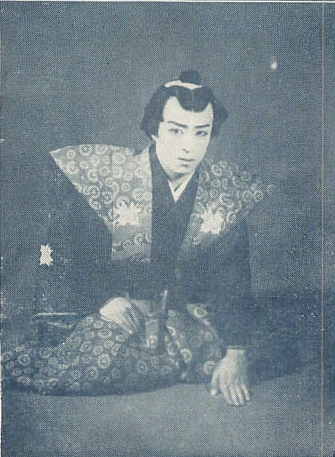
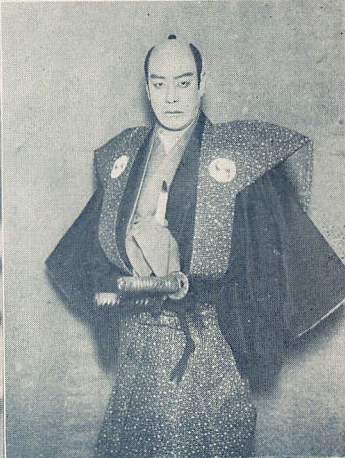


淨瑠璃
「野崎村」

「ましと」 津磐常



「文紀」 唄長



大石内藏之助 阪東壽三郎 伊達左京亮 阪東壽之助
 脇坂淡路守 嵐 橘三郎 矢頭右衛門七 阪東壽之助
 およし 中村霞仙 吉田澤右衛門 嵐 珪藏

◇ 元祿忠臣藏 ◇



◇十一月の浪花座◇

勝田新左衛門	中村扇雀	おるい	中村駒之助
大根賣七郎次	中村扇雀	吉良上野介	嵐 鷹 正
浅野内匠頭長矩	中村扇雀	大石主税	實川延太郎



『井伊大老の死』

井伊掃部頭直弼・辰巳柳太郎



◆新國劇◆ 十一月の南座◆

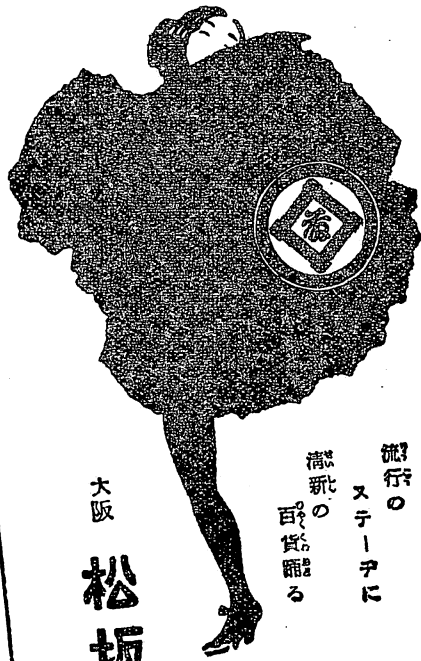
正室昌子の方 二葉早苗
側室お静 長島丸子



『弟兄藏新』

助之虎川小 郎五番徒博 苗早 葉二 浪 お
郎太柳己辰 郎十新井櫻 吾正 田島 藏新の那且小





乙

流行の

ステータスに

高級

百貨店

大阪

松坂屋



スキナシ紙

姉妹品

スキナシ石鹼
スキナシ紙白粉

清新な感觸!!

御愛用を乞ふ

本 鋪

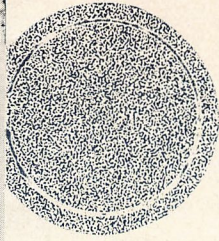
中 田 斯 キ ナ 屋
大 阪

發 賣 元

朝 日 堂 株 式 會 社
大 阪 市 東 區 南 久 寶 寺 四 町

◇新國劇・南座十一月興行◇

『警察官』

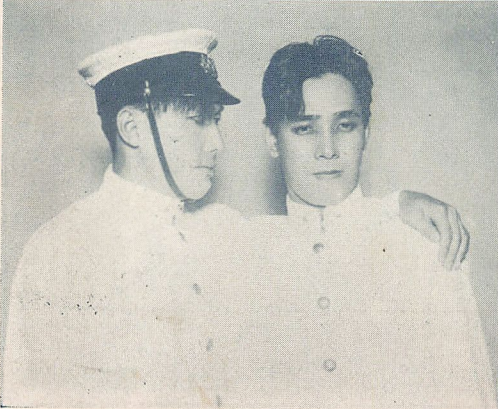


伊丹巡查 島田正吾
橋本巡查 辰己柳太郎



大島署長 野村清一郎
伊丹巡查 島田正吾

田鶴子 長島丸子
橋本巡查 辰己柳太郎



文樂座人形淨瑠璃

◇十一月興行◇



『廊文章』

夕霧 紋十郎
伊左衛門 扇太郎



『大晏寺堤』

春藤治郎右衛門 榮三
弟新七 紋太郎



文樂座

若	手
興	競
演	行



裂 小・具道小 裳 衣 貸

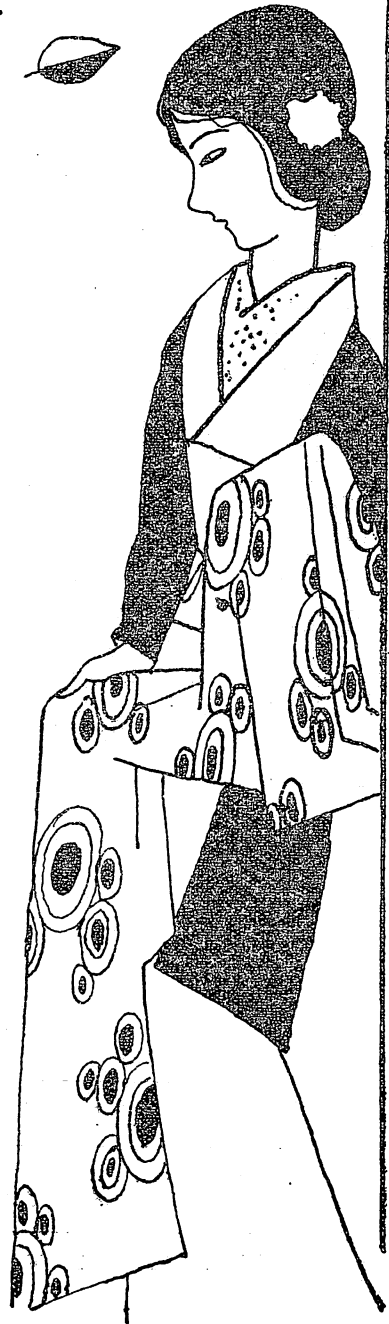
素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

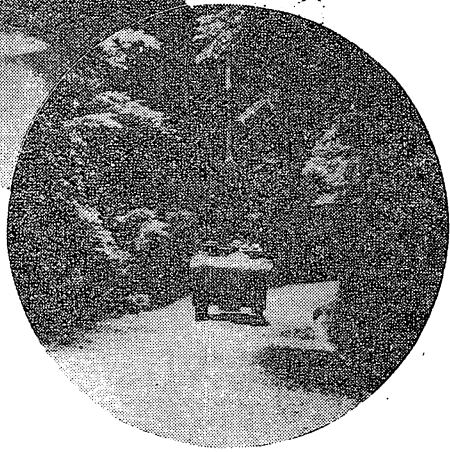
本 店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京市淺草區駒形町二十三番地
電話 淺草 六 六 六 一 番

「其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、御來客の御相談に應し便利よく取計ます」



紅葉狩



奈 信 多 室 吉 香
良 貴 武 生 野 落
公 山 園 峯 寺 山 溪

案
内
書
進
呈

急 行 大 増 發
觀 楓 大 割 引

の り は ・ 穴 阪 上 六

大 軌 參 急 電 車

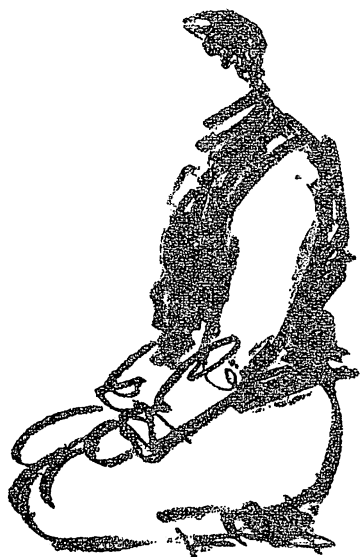
電 話 南 五 五 〇 三 番

十一月號

藝雜·究研劇演·刊月
通 類 編

第八年

第 八 十 六 輯



井上正夫の八重小笠原長

酒中日記

十一月の藝文研究之演

一九三三
梅谷三子

芝居の末

忠臣藏評判

西尾福三郎

「十月興行の忠臣藏は如何でした。」
 「幾らバラ／＼事件が流行の折とは云へ、通し狂言を名題にした忠臣藏が頭無しとはドウもけしらんね。」
 「スピード時代です。時間の都合なれば是非なしとお詫め下さい。」
 「同じ出すなら七段目の代りに大序を据へてほしかつた。今度の茶屋場の顔ぶれそのまゝで大序へ嵌る筈ぢや。外の芝居ならとにかく、忠臣藏の大序は大事にせにやいかん。」
 「でも今の見物は忠臣藏の發端は勅使響應の三・一四事件だと云ふ事をよく

知つてゐますからね。そこへ全て世界の異つた兜改めや顔世の肘鐵場をこれが忠臣藏のプロログですと見せた所で承知しません。序を省いたのは忠臣藏を赤穂事件として瞭然認識させる為の親切だつたかも知れません。」
 「馬鹿云はつしやい。抑々忠臣藏なる狂言は……」
 「イヤ分つた。分りましたよ。理屈はもう澤山、それより今度の役々の評判を何うぞ……」
 「本來首尾のない狂言に藝評もへつたくれもあるもんか。」
 「マ、さう怒つちや困ります。ともかくこの顔ぶれについて何か云つて下さい。何れもこれこそと思はれる役所をわざと外して意表に出た所に妙味がありはしませんか。」
 「役所を取りかへてその興味で見物が

来る程忠臣藏ちう芝居が今日の人間に分つとるかそこが疑問ぢやて。」
 「へえ」
 「現に肝腎の大序があつては理解の邪魔になるちう意見を貴公が持つとるやうではお話しならん。」
 「でも見物はワンサ／＼で御覽の通り満員日延べの状態です。」
 「ア、世も末ぢや。」
 「所で三段目の批評をどうぞ。」
 「見とらんよ。」
 「さうですか。」
 「終りをちよつぱり覗いたが、師直にその手はと云はれた判官が兩手を突いと答へとる。現に夜の紙治では兄にその手はと云はれた鷹治郎の治兵衛はこの手を突いてとちやんと答へてゐるそれから本藏に抱き止められた時チラりと振り返る所をやらんのもいかん。あ

の時の悲痛な眼ざしが九段目の本藏に腹をきらせる事になるんぢや。」

「そんなら四段目は？」

「皆な厭な事をせんのでこれが一番氣に入つた。福助の石堂はお上品でもすれば判官様より上に見へた位だ。あれに情があつたら申分がない。右團次の薬師寺も安敵にならん所、愁傷だのを云はん所も脇役の心掛がみへた。宗十郎の判官も三段目より上等ぢや。上書を唇で讀んだりしないし、かたみを二度云つて、後の分でかたきと聞かせてゐたのも一と工風、死んでから駕籠抜けをやらんのも氣に入つた。」

「松遊の力彌は晝でこれ一役ですが如何でした？」

「茶屋場の前半が見たかつたよ。よか稚兒さんぢや。」

「抜衣紋に赤い脚絆がよござんしたね

「力彌は女形の心でやるもんぢや。長太夫の九太夫もゆつたりとした大星の上席家老らしく、何處やら故傳九郎の面影があつた。」

「幸四郎の大星はバタ／＼無しで出ましたか……」

「澁さを狙つて意表に出たんだ。團州の型ぢや。心も空の氣持は出てゐたよ爰は千柳の筆で出雲の言によると大星は既に切腹の事は承知の上たゞ對面の間に合ふやうに日頃の仁態もなく一心にかけつけた心でありたいとの註文があつたさうぢや。」

「するとバタつきとバタなしとどちらがよいので……？」

「ハ、西洋料理ぢやあるまいし。どつちでもえゝ要するに腹の問題ぢや。」

「これは恐入りました。では明け渡し

「引かうてやは御家老一寸焦りすぎた爰は誰でもうまく行かん所ぢや。それに提燈の紋一つを持扱ひ兼ねてゐるのは困つたモンぢやて。助高家高賀ちう嘉永頃の役者の型とか云ふが感心せんな。」

「さうですかね。」

「お肉つきの血のりを替めるのも、臥薪嘗膽と云ふ言葉をかきたつつもりか知らんが俺しや厭だね。」

「では五段目を。」

「定九郎の出がないので演所が尠ないそれでも勘彌の御家人崩れや、吉右衛門の愛嬌のあるのとは又變つた太い所があつて、落入りも踊地があるだけにマア／＼と云つた所。」

「勘平は？」

「あの年で颯爽と出てきたから驚いたよ。五段目の勘平は出のイキ一つだか

らの。人と知つての愕き、トンとギバに落ちての仰天、それから身も世もない後悔、この最後の切ない身振りかうまかつた。」

「愈々六段目です。」

「二重屋台は珍らしい。竹のぬれ縁があつたりして山崎の小百姓にはチト不似合だ。勘平が戸前の川で足を洗ふのは成駒家はんもう勘平役には足を洗つたと云ふ洒落か。二人侍の出で道行きの衣装を取出すのは遺かに鴈治郎考へたな。それにしても三段目の後へ裏門のかけつけを出してくると、この場の衣装が一層物を云つたのに、そして色にふけつた許つかりにと云ふ勘平腹切りの性根が徹底したらうにな。」

「それが年寄のくり言と云ふ奴さ。」

「なに。」

「イエその他の役々では……」

「文句を云ふなら批評は止すぜ。」

「さう云はずに何うぞ七段目を。」

「七段半目だから批評も半分がとこだぜ。密書を短かく捲き込んで行くのは理づめの行き方で團州型、身の上の大事とこそは柔剛自在な碎け方の物足らぬは幸四郎の人柄、何れも成駒家を見押れた目にはくすんで寫るは水の違ひと申すもの。九太どのが梯子で圍はれななので動物園じみなかつた代り逃げて行きさうで氣になつた。」

「その他の役々では……？」

「福助のおかる、魁車の平右衛門、外全部を通じて一言つゞでも中上げたいが長口上は退屈の元。」

「何うせお前さんは優め嫌ひの口悪爺それからの口上なら大ていきかすとも知れてゐる。」

「何だと。」

「イエこつちの事です。ありがたうございました。ハイ左様なら。」

十月の歌舞伎座

夜の部を觀る

森 ほんのほ

堂島繁昌記

當然これまでの悲境から脱して、幸運に轉向すべき筈のものが、ほんの一寸違ひでその幸福を掴み得ず、遂にそのまゝ暗い生涯の幕を閉ちてしまふ——といふやうな意地の悪い人生に行きあはせた、同情すべき一人の人間を主人公にしたシベキを書いてみたい——さういふ意圖が作者大村さんにはあつたのだらう。堂島の帳合米許可の一件は、いはゞ誘ひ水に過ぎなかつたのだらうが、それがとゞ大阪を主題と

する脚本だつたが爲に、帳合米一件が表に出て、主人公たるべき管の人間のシバキが蔭へ廻はされるやうなハメになつてしまつたらしい。(彼どこまで運の悪い男なんだらう。)だから、書いて脚本に難を求むれば、この二つの材料のクロツスする處にあるのぢやないかと思ふ——。

主人公でゐて主人公らしくない福助の清兵衛、ツレのくせにシテより割の良い魁車の清三郎どちらも車輪には勤めてゐたが、福助はいやいや籠訴するやうで覇氣が無く、魁車はオシバキがしたくて眞實性が薄い。大向の拍手にいゝ氣になつてゐたら大間違だ。市藏の加賀様は好きさうで悪い役。宗十郎の町奉行は、お附合らしさうでゐて、案外しやべる。お忍びには違ひないが少々八丁堀の氣味がある。頂戴出来る

のは長三郎の土方、あれでもう一息愛嬌が無けりや尙更可い。

面白いのは鷹治郎の何屋の何某、謂はゞ芳子の口上代りで、無論脚本には無い役だが、舞臺をパツと明くして、道具變りのキツカケまで持つ。だが、そのキツカケのイキが實に巧い。福助の清兵衛が思はず頭へ手を上げるのを見て「翌の濱は高い」と横手を打つあのイキだ。而もこれ程鷹治郎丈の個性をハツキリ出した役を私は今日まで未だ見なかつた。その持ち味が相場師といふやうな、アクの抜けた人間にピツタリ嵌つてゐた。これと比べると、福助の清兵衛はまるで學校出の若旦那やうだ。芳子の爲に述べる狂言半の口上も、即かず離れず、圓轉滑脱なものだつた。

名和長年

右田寅彦脚色の方でなく、露伴氏の原作に依つたのは宜しい。

幸四郎といふ優のコウセキは、ふくらみもあり、潤ひもあつて實に好いのだが、どういふものか力が薄い。これが爲折角の名臺詞が迫力の弱いものに感じられる。臺詞の意味も能く通り、抑揚も甚だ結構なのだが……惜しみてもなほ餘りある次第である。然し、今更めくがマスクは實に立派だ。かうした役になると、此優か左團次を措いては外に無からう。

堯心は魁車だが、勸彌の當てた役だけに骨が折れやう。演出は先づ勸彌通りで、それが爲か時々勸彌らしい處がチラチラ眼につく。が兎に角、前狂言の清三郎をした役者と思へぬ程の佳い出来だ。

忠顯卿はやツぱり鷹治郎が附き合つ

てゐる。元來、忠顯はあの華々しい戦死から觀ても、武道も相當のものだつたらしい。都の樂人（芝居でガクジンと發音してゐるが、ガクニンの方がよくはないのか。）と偽つてゐるが、時と場合で大立廻りをやる筈の人である。鷹治郎にもさういふ心構へはあつたやうだが、もう一息さういふ點が窺はれても可いと思ふ。

名和の一門の人々の中には、セリフの粘る優もかなりに在つて聞きづらかつた。大方の濱の女はもつと體格のある、もつと愚直に見える役者が欲しい。鷹之助ではあの役が生きて來ない。

幕切レの折の頭を鷹の忠顯卿が奪つてゐるが、あれはやツぱり曲の主人公たる長年の幸四郎に譲のが至當だらう

道行浮時嶋

芳子がお披キの出し物で、宗十郎、

幸四郎が附き合つてゐるのは流石に成駒屋のお嬢さんだけのことはある。宗十郎の久松は後つきが悪いが、體を五分殺して、相手を引立てながらジツクリ思入れも、オシバキもしてゐるのには敬服した。幸四郎の猿廻しも餘り自分を光らさずに、軽くくと努めてゐるのがよく分つた。

心中紙屋治兵衛

やツぱり治兵衛の出が面白かつた。過日京都座で扇雀のを觀たが、その演出の不充分な點、不充分な理由をハツキリ會得することが出來た。幸四郎の孫右衛門は初演ほどの興味は感じなかつたが、それでも治兵衛の身を思ふ眞情は充分に呑み込めた。福助の小春は泣き崩れてゐる間が惚ればせさせた。それだけでも充分。

釣女

右團次の大名、もつと大マカナゆつたりした心構へ、態度でないと思ふ方もゆつたりしない。松莖の上臈は何となく元氣の無いのが氣になつた。新郎の顔を始終しげしげ見てゐるのは、新婦らしくて非常に好かつた。宗十郎の太郎冠者はいかにも狂言どりの物らしく、面白さうに見せてゐた。長三郎の醜女もその點では引けを取らず、思切つて踊つた。

本家本元の能狂言の方では、乙と呼んでゐる醜女が大勢釣り上げられ、これが太郎冠者を追ひ廻すので、寧ろ此行き方の方が歌舞伎には相應しいのだが、何でそれを逃げたものか、一度試みに演つてみるもよからうと思ふ。

(十月十四日見物)

新派の腕と味

— 十月中座夜の部 —

高谷 伸

舞台馴れない人でも佳い芝居を見せることはある。しかし、それは持味から来る住さで、巧さでないために、どこかに危いところがありがちである。

だが、新派の人々には新劇と違つて危なげのないこと、歌舞伎の人々と共に、何としても、くらくらといふ感じがある。

中座十月の夜の部の三狂言を見ると、どれにも、この叩きこんだ腕といふものが感じられる。

順序から行つて、第一「城山落城の日」である。その日の南洲夫人を描いたもので、動きのすくないのに反比例して理屈が多い。その一幕をぐつと締

めてゐたのが喜多村の夫人米子の腕である。歌右衛門風の烈女でなく、人間味のあるしつかりさを持ちきることは難事だが、それを耐えてきたところに流石だと思はせる。大矢の川口雪逢は以前なら高田といふ役柄であらうが、あのヌー棒では今の観客には納得が行くまいといふので、偶像的にたゞ輪廓の大きくなるのを望まず人間として慈父として人の師としての雪逢たらんとしてゐたのも認めてよい。

英の姪みつ子や西郷の子弟たちの九州辯にも苦心は察せられた。

だれ易い長い一幕を、立派に演じたつたのが、今もいふ喜多村その他の腕である。

「女浦島」になると、これらの腕の上に多年の練達と持ち味が加はつたのだから鬼に金棒だ。どの役もどの役もび

ちびちしてゐる。

作はかなり誇張と作爲が目立つが、俳優の個性を呑み込んでその技倆を發揮させるためには、十分行き届いたのである。

河倉のお蝶がふり廻す九代目さんとダンス麻雀の隔たりは、舞台に見える年齢とあまりに差が大きい點などが今いふ誇張だが、これを小さいくすれば實にびつたりくる花柳相である。技藝上の巧さ亦、云ふまでもない。

喜多村の辰次も年増藝妓のイキを心憎いまでに呑みこんでゐる。

花柳、英、若宮の藝妓、村田式部の母親その他、みな澁漣として申しぶんなしの上出来。小堀の兼松の時代に残された人もよく出てゐるし、村田正雄の音吉も洒落てゐる。お蝶に吐られさうな讃辭だが、かうしたものになると

チムワークもよくとれてゐるし、ノ
ーエラーでフアイプリーの續出である
「瀧の白糸」も同座で家庭劇が出して
から半年も経たぬうちに冠せて出す程
だから、十分自信があつたに相違ない
し、その期待を裏切らぬものがあつた
家庭劇の場合は、もつと時間的に制
限があつたらしいし、いろんな條件に
苦しい點もあつたらうが今度はそれよ
りかなり自由だつたらうと思ふ。それ
にしては筋は通るといふものゝ序幕を
省略したのは惜しかつた。
全篇の山である卯辰橋の舞台装
置は家庭劇の方が新らしいだけ目さき
が變つてゐたが、相乗の情調などは流
石に今度の味だと思ふ。
花柳の瀧の白糸は法廷が斷然光つて
ゐる。序幕つまり二幕目からだんだん
盛り上げて行つて、大話でぐいと突込ん

で見せるところ、新派中堅を背負つて
立つだけの人だけに確かなものだ。
梅島は卯辰橋の場がよい、時々意識
的にカン所を外すやうな氣味もあるが
花柳の芝居をよく受けてゐた。
その他の役々では小堀の金太郎と英
のおまつの夫婦がよい。村田正雄の南
京松は鏡花好みではない。法廷の場は
九團次の藝を連想した。菊波の車夫な
ども相當の出来だ。
結局、三つの出し物を通觀して俳優
の技藝としては、それぞれ満點に近い
成績を擧げてゐる。
しかし、言をなすものは、この種の
戯曲選擇では新派はまた第二の行き詰
り時代に遭遇するだらうといふ。なる
ほど、本場の立派な絹物より、人絹物
の流行する時節だから、その言をあな
がら否定することはできないかも知れ

ないが、人絹物でいざといふ時、卑下
するよりは、一揃ひぐらい取つて置き
の衣裳があつて欲しいものだと思ふ。
新派のこの一團は、流行ものといふ
ことは出来ないかも知れないが、徒ら
に迎合を事として、その長所を棄てる
よりは、自分の腕なり味なりを伸ばし
た方がよいのではないか。
歌舞伎の人にも新劇の人にも缺を入
れきることのできない畑を持つてゐる
人々にとつて、そこを培ふて行くのが
廻り道のやうで、つまりは正しいので
はないか。
たまには赤い花を咲かせるのもよい
が、自分の畑は自分の畑で、いつまで
もよき耕作を忘れないでゐて欲しいも
のだと、これらの舞臺を見て、さらに
強く感じるものがある。

十月の新國劇

山口 廣 一

◇……前進座の後をうけて、十月の十七日から浪花座で短期旅行をやつた新國劇が意外の大當りで連日文字通りの千客万來を續け、止むなく二日間も日延べしたとは近來のおめでたである。わけて、この興行で新國劇多年の懸案だつた一日一回興行を見事に實現させたことは全劇壇的に見ても立派な一つの主張として十分その功を讃へたい。當り屋、新國劇！

◇……さてこの大當り狂言の内容だが上演脚本三篇のうち松竹當局が宣傳これ努めた第二の竹田敏彦氏作「警察官」にしる第三のサンデー毎日所載「子母澤寛氏原作「新藏兄弟」にしる共に作

者一流の大向ふ受けのいゝ面白い芝居で近來での超満員を十分理由づけてゐたが、たゞ遺憾だつたのは第一の中村吉藏氏作「井伊大老の死」の上演態度だ。

◇……「井伊大老の死」は澤田正二郎がゐる頃の新國劇が市川左團次一派に次いでこれを上演し同劇團の記録に一つのエポックを劃した名品で五幕十場の長編戯曲だが、今度はこれをその後半にも満たない五場（然も作者の意圖からすれば、さして重要とも思はれぬ部分）のみを開幕劇風に取扱つたのは何としても首肯し兼ねぬ。これでは原作への冒瀆であり、観客への羊頭狗肉であり、第一肝心の大老井伊掃部頭なる人物が曖昧糲糊として何の感銘も起らねば、第三場井伊邸書院に顔を出す

愛妾のお静など、まるで意味をなしてない。氣をよくしてゐる今度の新國劇だが、これだけの苦言は呈さざるを得ぬ。

◇……第二の「警察官」は一般から往々にして誤解されやすい警察権の正しき行使とそれに伴ふ警察官の身命を賭した勞苦の一端を戯曲化した思ひつきが器用である。それも犠牲的精神といつた花々しさよりも堅實な警官としての「天職」を強調した點は一層示唆的だつたし、芝居の味ひもこれでグツと深まつて見えた。演技では畑中の信念に生きる老巡査が枯淡味のうちに手堅く描かれてゐる。島田の伊丹巡査も野望と神經質らしさが立派に現代人だ。小川の不良重役も感畫的で愉快だつたが、たゞ辰巳の橋本巡査だけは場當り

がやゝ露骨でなかつたか。なほ、最後の捕物の場の格闘は新國劇の剣を持たない劍劇として新しい異彩を放つてゐた。

×

◇……第三の「新藏兄弟」は武士の兄新十郎と博徒の弟新藏をめぐる兄弟愛を基調に推したもので、作意に取り立てた新味はないが、ヤマの多い舞台面の變化が豊富で然もそれが終始纏つてゐて所謂わかりのいゝ大衆文藝の本格的な境地を示してゐる。わけて新藏が情婦お浪の身體を番五郎と金で張り合ふ發端の波瀾や江戸市中夏祭の賑ひの中を馬上で引かれゆく兄の新十郎を陰ながら弟の新藏が見送る情景など、グイと観客の胸に餘韻が迫つて来る。但し第三場で新十郎と新藏が圍碁にかこつけて胸中を打ちあけ合ふのはどうも

少し歌舞伎風である。

◇……辰巳の新十郎は前半の武士で躍動するが、後半はモ一工夫ありたい。島田の新藏は地藝に燻しをかけて淋しい舞台の作意にうまく嵌つてゐた。金井の源五兵衛は老巧。小川の番五郎も本役だ。そのほか長島のおくめ、畑中真などもとり／＼によかつたが、特に第一場に出る薩藩隊士と村娘の中にズバ抜けて巧い人のゐたことを特筆する

非常時を突破

した新國劇

豊岡佐一郎

澤田の名と切り離しては考へられなかつた新國劇と云ふ名稱が、漸やく島田辰巳を中心とした新組織の劇團名と

して落着を見せて來た。今だから正直に自分の非を告白するが、僕は、澤田が死んだ時、澤田の名と共に新國劇の名を歴史的なものとして保存する事が新國劇の演劇史上の業績を完うするものだと信じた一人だつたが、今日の新生新國劇の姿を見て、僕は自分の認識不足を恥るものだ。澤田を失つた非常に善處して今日の隆盛を見るに至つた新國劇の成長過程は、正に此非常時の一篇の教訓的材料ともならう、と云つても褒めすぎではなからう。

十月浪花座の短期興行は「井伊大老の死」だけに澤田の影を偲ぼせたが、「警察官」と「新藏兄弟」とは完全に現在の新國劇のものだつた點に好意が持てた。舞台上の出来から云つても後の二戯曲の方が斷然優れたものだつた。「井伊大老の死」は勿論半分にもどめ

たその大カットのせいもあるが、一向に大老の立場など不明瞭でその苦衷に同感を喚起しなかつた事は、此芝居を致命的なものにした。それに靜的な芝居には辰巳はまだその貫祿と氣魄に缺くるものがある。だから背筋句の場は失敗で、次の玄關の場、出の一瞬に颯爽たる意氣を見せ、役者が大きくなつた事を感じさせた。但し御籠に乗る前、吃つと空の一點を見詰めた澤田の氣概は辰巳には見られなかつた。この芝居では辰巳だけではなく、他のどの役も感心したものはなかつた。品川妓樓の場など此劇團としてもつと盛上つて來るものがある筈なのに、一向興奮させなかつたのは、金井の金子の調子が以前より弱くなつたのと、高木の有村が好人物に見えた爲めに全體を低調にしたのではなからうか。

然し此芝居を面白くなくした最大原因は、役者の巧拙よりはその大カットにある。時間の都合でカットを餘儀なくされる場合には、かうした一人物の主張なり性格なりを克明に生かさなければならぬ様な芝居はやらぬ事である。竹田氏の「警察官」は御用劇とは云へ、現在の社會事象を巧みに取入れたそのジャーナリストイックな手腕は凡でない。藝術的な意味に於てまだ一歩手前のもではあるが、新派の現代劇とは違つた、現代劇らしい現代劇をやる事は此劇團の唯一の強味だと思つてゐる。一般が歓迎する劍劇を此劇團が看板とする以上に、そしてさう云ふ現代劇を上演する上に此劇團の文藝部の優秀さを認める。

井伊大老で着なれぬ袴で頗る不自由さうだつた野村畑中雄島等「警察官」

になると皆自由で生々としてゐる。しかも井伊大老ではどの役も感心しなかつたのとは正反對に、島田の主役を始め雄島、辰巳のワキ役にいたるまでがいゝ出來だ。特に、いつも鬍物の老役か敵役で澤田な雄島が現代劇に於て自然な演技を見せた事は、僕に取つてはやゝ意外な發見だつた。彼は近き將來現在以上に新國劇の重要な位置を占める様にならうと思ふ。特にもう一人褒めたいは野村の署長だ。小川の紳士との應對もうまければ、最後の訓辭もセンチメンタルにならず相當力のものもつたものだつた。辰巳の巡査も軽い味と共に強い友情を巧みに表現して一つの性格を形造つてゐるが、澤田の影を脱した彼本來の面目はかうした役にあるのだと僕はかねゝ思つてゐるのだ。島田畑中は共に前牛の出來を取る。乃

ち素でやつてゐる間の二人の方に好感が持てた。お芝居になるとこれも藝の巧拙よりも脚本の甘さに参るのだ。病室の部は受ける處でもあらうが、常套すぎて所謂新派式の現代劇に墮すおそれがあった。小川の紳士はカリケチュアに過ぎ他の自然な調和を缺いたブルヂョアと云ふものはプロ演劇以來ともすると戯畫化される習慣になつてゐる様だが、もういゝ加減にさう云ふ演技手法から卒業すべきである。

リアルな現代劇へ！ 眞に現實的な現代劇を新國劇に期待するものだ。「新藏兄弟」は處々理屈に合はぬ處があるが、今日の大衆演劇として、また辰巳島田を充分に働かせた點に於て新國劇の賣物狂言とならう。ラデオで聞いた時は面白くなかつた。芝居を見てそのカットのひどいのがわかつた。荒

筋だけを了解させる様な放送は宣傳にはならないで逆の効果を生みはしないか。ラデオだけではなく、今日の様に比較的短時間に多くのものを見せようとして、筋を通す事を本意として味の薄い芝居を見せる事は決して「現代」に適應したものではない。芝居は矢張味のこつたりしたものゝ方がいゝのだ。この芝居では僕は、金井の薩摩の隊長のいかにも好色で安手なのを特に推賞したい。僕は主役よりもワキ役的な人物により注目する癖がある様だが、それと云ふのも、主役の方は見ない先からほゞ見當がついてゐるから、新發見に驚ろく事が少ないからだ、辰巳の新十郎、島田の新藏、僕の豫想通りでうまいからと云つて取て驚ろかない。當然の成績である。最後に再び希望として繰り返すが、

眞に現實的な現代劇と、新大衆劇とを

取り去られた鐵扉

—中座の南地舞踊を見て—

中井浩水

◆色町の濶習會といへばその土地の演舞場で催し、場取りはその土地のお茶屋から申込む、これを觀ようとする客はお茶屋からでなければ觀られない、つまり色町といふ別世界の中の行事で世間の風にはなれる催しであつた。

◆昔、北陽の小金、小清、呂之助等々の柳櫻會が花やかなりし頃、北の新地は濶習會といへば當時の北濱帝國座、堂島座等々で催し、土地に演舞場なきを慨し取締其他に建設の議を申込んだが一向まとまらないので堂島かどのに立籠つて大デモをやつたことがあつた

◆南演舞場といふ立派な廓内の演舞場を有するに係らず、今度松竹とタイアップして中座へ進出した南地舞踊會のやり方と當年北陽藝妓のデモとを對比して思へば二十年三十年の歲月の推移時代の姿の變りに驚かされる。

◆今度の南地の中座進出はつまり大衆に「名妓の所作事」を呼びかけんとした企である——内部の計算上の問題は別として——これを思ひ立つた阪口氏の意圖は壯である。

◆然し今度も基本を茶屋場取りに置いて大入つゞきであつた爲め、芝居茶屋の客又は一般客で觀覽の機を得るものが少なかつた。しかし、大衆と藝妓、世間と色町との鐵扉を去つて手を握らうと企てた一點に於いてもこの中座進出は意義ある催しであつた。

◆名投手を有する野球チームは常に強

者であるさうだ、腕の立つ實力あり勇氣のある當事者を有する色町は他廓を壓して常にリードする、明治の前期、新町には木原茂兵衛といふ傑物がゐたその頃の新町の盛時をいふも老通は語る當代では南地に阪口氏がつてその覇を唱へてゐる。

◆罷り違へば大和屋藝妓一手で演つても好い、觀覽席も大和屋の一手で買占めても好い、千金二千金の損失がなんだといふ意氣込み、この意氣込みだから思切つて仕事が出来、阪口氏はいつも自分の懐から持出しをしてゐる。その代り獨斷も專斷もやる、ある意味ではタイラントであらう、平相國でもあらう、さういふ人物でなければ思切つた仕事をドン／＼遂行出来るものではない。

◆私の觀たのは初日の宵であつた、

六玉川、蝶、どんつく、毛谷村、扇獅子、兆殿司の猫、戻橋、春、野崎お夏

の十番、出演者の多數は大和屋の妓であり、そのうちの又多數は大和屋の養成所出身藝妓である。

◆中座の舞踊會は事實上に於いて若干の大物以外は大和屋養成所出身によつて六七分を占られてはゐないか、その若干の大物の中でも大和屋に籍ある一流妓が占めてゐる、且つ舞台装置から按

舞衣裳好みまで、全く阪口氏の好みであり又阪口直系のイキがかゝつてゐる

◆云ひ代へれば阪口氏好みの舞踊會で大和屋藝妓の舞踊會の觀がある。

◆達者である、舞台度胸満點である、日頃の習練の効はよく窺へるが何と云つて好いか、ある色彩がある、その一

色だ、その色にすぐれた光りはあるが癖がある、匂ひがある。

◇やり過ぎる癖だ、突込みすぎる癖だ
匠氣の匂ひだ、銜耀の匂ひだ。これは
思ふに達者な藝をもちそれに共なふ舞
台度胸なるものゝ長所であり、短所で
ある。

◇初日のだし物で「兆殿司の猫」は故
人齋入がやつたと聞いたが、これはい
かにも齋入好みの異色があると思つた
又荻江節の地で「春」をおはんが演じ
た。

◇新舞踊風でどちらかと云へば動きの
少ない凝つた手がついてゐるが、それ
よりも寧ろ春は曙の縁先からほのぼの
と明けそむる照明と若い女の扮装の色
の調和の美しさにより以上の繪畫美を
感じた。

◇毛谷村などに至つては私にとつては
あまり興味がないといふよりもアンニ
ユイを感じた。

(畢)

戻り橋の綱に

世々義の至藝

—南地温習會第一日—

新谷 誠 水

向ひ三味街、こゝ芝居街、チヨンと
木がしら道具が廻れやゝと大和阪口祇
三郎クン自作の南地小唄にもある如く
南地五花街と芝居街の關係はなか／＼
に深い仲だつたのが、いつかの春の踊
からもつれ／＼て双方事にふれていが
み合つてゐたのが、チヨンと木がしら
道具が廻つて、南地の温習會を中座が
受けた。即ち温習會の劇化、繪番附一
つにしてが大歌舞伎並で、鳥居風の挿
繪がつく豪華さ、表紙も太左衛門橋と
櫓を浮き出させた、趣向、たゞ名妓
所作事：とこの名妓の二字だけが妙に
氣にかゝつた。

さて初日の呼物、この日を通じて一
番に世々義の戻り橋の渡邊源氏綱を稱
へねばならない、由來女性の舞踊、ま
してや歌舞伎所作事めいたかうした出
し物の立役をやるとすると、どうして
もキメ／＼の型がきつぱりゆき兼ねる
か、ウンと臭く見得をするかの二つに
きまつてゐるものを、世々義のそれは
まことに悠揚迫まらず、然かも名調子
變に芝居もせないうちに、いゝ型を見
せた點で、台詞の研究も實に行届いた
ものであつた。次にその端麗をはめる
ものにお染のお夏がある、梅幸が選ぶ
もの衣裳背景、なみ／＼の氣のかけ方
ではない事がうなづける、加ふるにお
染の濃艶な姿態は、半分は顔で見せた
お夏であるが、後半以下や、長たらし
く思はせたのはどこか迫眞力に不足が
あつたのである、それに今度は腕白共

にもう一つキビくした腕白ぶりや可愛さが缺けてゐたのが一つの禍ともなつてゐる、たゞ極彩色といふのが如何にも見物を惱殺しつくしてゐた。克榮の馬子は或者をほめるだけで、ひつきようは藝者が好んでやる役では無い。兆殿司の猫は、縦ぐるみの猫が腰をおつ立て、四つ這でいろくなしぐさをする、中味が女性だといふだけで、何やらエゲツない悪を感じた、然かもこの間が諄いのと娘の化性の者になつてからのテンボがくどくどとダレ氣味である、ダレルといふと、おはんの「春」がそれだつた、中座といふ大舞台にはふさはしからぬ出し物だ、大和屋式にむさうさにかたづけけた物に野崎と毛谷村があつた。毛谷村は淺黄が落ちるともうぼろんじ姿のお園が立つてゐる、六助にからむ間が、からサワリまでは

一ト通りで、これがすむと六助の庭の青石に飛んですぐ暮にならうといふ、まことにスピードな毛谷村、勿論此の繪面もなけねば、椿と梅の紅白の枝の件りも、ない毛谷村で、ひつけふはお園本位で六助は三助位のしどころがないといふ改悪だ、然かも花子のお園は線が弱く、くす子の六助の顔のこしらへは三枚目といった感じである。野崎村もこれによく似たようなもので、久作が出て來ない野崎、サワリからすぐお光の切り髪で、三人が涙六つの袖といふ珍文句が飛び出るといふしまつたつた、花子のお光、暮あきの今宵の婚禮を胸にゑがいてゐる間の、朗かな娘ぶりの間が一等、ぼたんのお染は情に深さうな女だつた。世々春の辰橋の小百合は、前シテの間は無難、世々義と舞台へ出てヒケメを取らない程進境は

して來たが、鬼女になつてからが、毛振りに氣を取られてかケジメくがはつきりしなかつたのは、まだ何んといつても大役だつた、それにこの辰橋の地方に一向生彩がなかつたのが一つの損ともなつてゐた機である。兆殿司に出た仕出し役の才三以下の所化僧達がちつとも照臭さがらずにやつたのは、遠に大和屋仕込でいゝとして、餘りも操ぐりすぎるのは好感が持てなくなるそれに舞台にゴチャヤくと小道具を散らしたまゝにしておくのは第一足許に氣を取られるものになつて、猫の間の狂の興味が大半そがれ氣味でもあつた、後見を求めて、一二の道具に使ふ外は消して貰つて然るべしだと思ふ。扇獅子には半分しか拜見しなかつたがあつけない幕切れであつた。

— 終 —

阪東妻三郎を語る

フアンの聲

木谷蓬吟

今の劇壇で、君あたりが活躍してくれば、いつたい誰れが活躍するか。

今が盛りの中でもないか、藝に油が乗つてくる最中ではないか、乗るかそるか、こゝが一番大事な時だ。

少々早く大家に収まり過ぎたのでは無いかしら。

第一劇場當時の氣持ちさへ、むしろ解消して、長二郎改め壽三郎時代に還元、大わらはの奮闘が見たいものだ。

力演、熱演を、技巧の上ではなしに腹の中から湧かして欲しい、君の藝運は今その機会に逢着してゐるのではなからうか。

體裁の割に細心な君は、モツと大膽に勇敢に突んで貰ひたい、君獨得の持ち味をまつこうに振りかざして、遠慮せず傍見せず、幕進々々々を切望する。

沈滯萎靡の大坂劇壇に、乾坤一擲の颯風を喚び起す急先鋒は、君を措て、ちよつと見當らないのだ「歌舞伎の澤正」！大に頼む！、これがフアンの聲だ。

缺點克服を

坪内士行

長所を擧げて褒める方が此の誌上への文としては適してゐるのであらうが、私は壽三郎君が好きだからこそ悪口を書く

實際壽三郎君は好きだ。いゝ人だ。だからもう一つバツとしないのだ。私の好

きな人は大概いゝ人だが、いゝ人は兎角世間的には損する場合の方が多い。殊に俳優仲間ではエゲツない人の方が成功率が多いので、私に好かれると云ふ事その事がすでに壽三郎君の缺點の一つだと思ふ。「あんな奴」と私に思はせる様になつたら壽三郎君はウンと成功するだらう言葉をかへて云へば、もつと強氣で、もつと横暴で、もつと人が悪くなつたらしめたものだ。柄宜し藝宜しなのに熱が外へ現れない。他の役者はみんなバルチザンだ位に思つて踏張つてくれて丁度いゝのではないかと思ふ。

藝宜しと云つたが、どうにか工夫してあの含み聲は直してほしい。聲の色はいゝ色だのに、そして又時には充分調子をハリうるのに、何故あゝ陰にこもり勝ち

なのであらう。気がついてゐないのか、
ゐても直らないのか。惜しいことだ。

以上二つは何遍も私は繰返して云つた
筈だ。どうか一つ踏張つて呉れ給へ。關
西のファンは君が第一投手として連戦連
勝せんことを待ち焦れてゐるのだ。責任
も重いが踏張り甲斐もあるではないか。
至囁々々。

私の観た

阪東壽三郎丈

行友 李 風

阪東壽三郎丈は、遠い長二郎の昔から
唯何となく好もしい俳優の一人でありま
した。

それはこの優の有てゐる素質の純情さ

からで、銜はず、企ます、強て當振らす
地味で素直な、癖のない藝風——好感の
持てるのが當然なのかも知れませんが。

ダガ併し、その素直さも時として、ツ
イ不器用の域に墮する事があり、どう巖
眞眼にも舞臺度胸が宜いとは云へません
兎角控へ目過ぎて小手が廻らず、今一息
の物足りなさ、いはゆる押の利きかねる
といふ憾がないでもありません。

熱はあつても閃きを發たず、力はあつ
ても鋭さが伴はない、あたら氣魄が藝を
通して充分に光り輝きません、ソコがこ
の優の舞臺の奥床しさで、喩へば燻し銀
か、龍銀好みの濫い所だと理屈をつけ、
只通がつて翫賞するにはソレで可いかも
知れませんが、成らう事ならモツと大膽
に、モツと放縦に、強くなつて貰ひたい

と思ひます。

役どころから云ても自體色氣に乏しい
優、それで敵役に廻つたとしても、圖太
い割に憎しみが利きません、そして何處
かに飄輕、洒脫といった一味の可愛さが
チラつきます——藝の寛ろぎが時に間拔
けて見へるのもツマリは氣組が弱いから
で——濃厚、鈍重、釋氣、凡ては練や輪
廓に比して、底力の強味に缺けてゐるか
らだとも云へませう。

爰で徒らに鼎の輕重を問ふのではあり
ませんが、孰方かといへば在來の型物よ
りも新作で演出かす技倆、福助丈や魁車
丈とは自ら、進むべき道を異にしてゐる
かとも思はれます。この點に深く省慮し
て、自分自身の本領を篤と見定めた上徐
ろに、その特色を大切に守り育て、往つ

阪東壽三郎を語る

阪東壽三郎を語る

て貰ひたい物です。

第一劇場の試練時代においてさへ、飽まで自我を憤み通した、謙譲の美德もさる事ですが、偶には熾烈な意圖に驅られ奔放な野心に任せて縦横自在に、思ふ存分の蘊蓄を傾け盡して我關西劇壇のために、萬々丈の氣を吐いて見るもまた痛快至極ではありませんまいか——と云つて何も己惚の鼻ツ柱を高くしてくれと、お節介な水を向けるのではありません、畢竟この優の危氣のない、望みある手並の程を深く信頼すればこそです、變に勘違ひをしないやう、大いに考へて貰ひたい物です。

最近「夏祭」の九郎兵衛と「月笠森」の市助を觀ました、勿論無難には出来ましたが——なぜか舞臺が窮屈さうで、あ

る約束に縛られて身體や氣持を自由に扱ひ兼ねるといつた風にも思はれました。

それは果して何が爲なのか、我童文、延若丈等の居なくなつた後の、秋風寒き大阪歌舞伎將來のため、我等の阪東壽三郎丈たるもの、緊禪一番、眞劍になつて深く大いに考へて貰はなければなりません

阪東壽三郎に寄す

食 滿 南 北

大阪の劇場を背負つて立つといふ意氣で進まなければならない者の中に、阪東壽三郎がある。

壽三郎は大阪には珍らしい、大阪型から脱した未來のある俳優である。

壽三郎はさう云はれる事によつて満足

してはならない。

ク生一本ク

と云ふことは俳優の舞台として尊ぶべき事か否かは今たゞちに斷定を下すべきさゝやかな問題ではない。

壽三郎の場合、今尠し大阪型を加味してもよいのではあるまいか。

君の學ぶべき者に、市川左團次のある事は識つてゐるが。又君の尊敬すべき者に、中村鴈治郎のある事をも忘れてはならない。

君は所謂、君の素質である

ク生一本ク

をもつと活用する要があるのであるまいか。即君は、大阪型と生一本とがうまく調和された時、君は全くの上手となり、完全な名優となるのではあるまいか

君はかつて、「女形」から今の役どころに轉向した事の賢いことを持つてゐる。

君は再々轉向ク

の要があるのではあるまいか。

このすべては

？

ではあるが……。

壽三郎に寄す

松本憲逸

壽三郎のことを書くのはこれが二度目だ。いふ前、壽三郎と我童の二人を擧げて將來の大阪歌舞伎の中心といふやうなことをいつたやうに思ふ、我童は東京へ行った切りの今日、残された壽三郎に至嚙するところ従つて益々大きいわけだが、

不都合なことは、私は最近餘り壽三郎の舞台を知らない——恐らく映畫の「忠臣藏」で彼の内藏の助を觀たのが最近の印象であるが、その印象に據ると、前説を繰す必要がないやうに思つてゐる。

大體壽三郎は餘り器用な役者ぢやないらしい、只持ち味を生かすことによつて成功してゐるやうだが、役者の器用不器用は、程度問題ではあるが、その大成には大した影響がないのではあるまいかと思へる。従つて壽三郎が不器用だといふことは、私にとつては大した心配ではない、と云つて外に心配があるわけでもないが、「役の性根を掴む」ことに腐心する彼の態度に好感が持てる。と同時に、これが將來ツと良き指導者を得て、正鴻を得つゞけるだらうかといふことが心

配になつてゐるのである。しかしこの心配は甚だ莫然たる不安に過ぎないから、恐らくは杞憂に過ぎまいといふ安心もしてゐるわけだ。

「役の性根を掴む」ことは平易なやうで乍く難しい。それについて感心したのは先日「忠臣藏」の鴈治郎の勘平だ、押入から紋服を出そうとした時、チラと見せるお輕のはでな衣裳、切腹してから着る紋服、門口まで這つて見送るしぐさなど、甚だ細い注意が拂はれてゐるが、こんな所に「勘平の平素」が躍動してゐる。こんなことは不器用な役者でもできる、正鴻を得れば成功する、だが正鴻を失ふと小刀細工に陥つて醜くなる。一役の性根を掴む——ことさへシツカリしてゐれば——壽三郎よ、君は大成する。とにかくシツカリやつて下さい。——終——

「忠臣藏」を語る



四 海 波

獨參湯の假名手本忠臣藏が大坂歌舞伎座のイタに掛つた忠臣蔵きつての茶目公、箱登羅の鷺坂伴内コソは、驚異的存在であるが、これはイク百べんもお目にかけてとあつて、助高屋高助にかはつた。

レイの下部三人あいてに本藏をばつさりいはすシート、ノツクのさなかに下部の帯が解ける。

判内すかさず、「さうおびゑては人は斬れぬ」

宗十郎と幸四郎のもとへ墓参の答禮にきた大阪義士寺の和尚さんへ、幸四郎が定九郎のせつめい。

「むかしは、大百のかづらに縞のドテラ、帯は丸ぐけ、山岡づきんを冠つて、勘平の文句にもある通り、立よりみれば旅人の死がいとふ位だから、紐のついた股引を穿いてゐました、いま私のこしらへの五分月代、五ツ紋くる羽二重の小袖、白献上の帯に朱鞘の一本ざし、蛇の目の破れ傘コテぬりに腕まくりした定九郎は、初代の仲藏が苦心の扮装で……」

和尚さん、幸四郎の定九郎を穴のあくほど覗いて、いとユカイ氣に。

「……、定九郎はカタキ役でも皆さんから憎くまれぬ、わたしはトテも好きでス……」

お寺も、非常時か、坊さんの外交の巧いこと。

親の顔と、ちゆうしんグラを知らぬものなし、宜なるかな、ファンから配役のゴ注文がくる、鹽屋判官高貞はタレがい、石藤馬之丈は某優に敵まるなんかは甲の上の及第

テン。

筆者寡聞にして、カナデホン忠臣蔵のなかに、大高源吾大石シユゼイ、武智光秀のであることをフアンのはガキによつてはじめて知つた。

——なかに、勘平とおかるの二つは是非某優に演らせは前代未聞の豪華版。



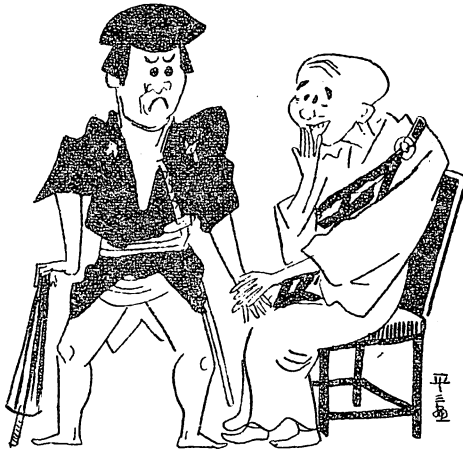
薬師寺がはいる、幸四郎の由良助、と長太夫の九太夫がデボチンと眼のピントを合はして、葬送の儀式を観客にきこえぬ程度でうち合はす。正面からカン高ごゑで。

「おふたりで、百五十歳ツ」

これが、のり物のなかの宗十郎の鹽治判官のおん亡骸に聞えて死がいが、ウッフツと笑ウ。

山崎街道へ、テンテレックで手負猪がはしつてくる。ライオンといふ意りか、「齒みがき家ツ」

與市兵衛が頂く縞の財布へ、稲むらから白い手がのびて



平五郎

白刃がピカリと光ると「ギヤング」

大向ふも並大テイの苦勞でない。

主家のノ非常時ノに直面し、興奮しきつてゐる力彌以下八十餘名の諸士が、薬師寺の嘲けりにアレを斬らうといきりたつ。

山良助が、右手で提灯をふり、左手を前へつきだし、舌にモーションを嚙らしてコレを制止してゐると四階から「交通巡察ツ」

いよゝ城わたし、おやくそくのチンテレン、チンリーの自來也の合方で鷹の羽の紋を扶くと提灯に丸いアナがあいて、同時にデンキの抵抗で舞臺も暗くなる。

一階すその紅顔秀眉の學生が、脳しようを絞つた歴史的のロング・ヒット、「穴手本提灯暗ツ」、なんかは、なんでもないやうで、一寸いはれぬ。

◆

しかし、いくら大向ふの巨砲でも、偶には好球を三振する強打者もある。

てつきり、千崎のセリフをきつかけに、腹を切るものと誤信した、監視シツ前のゴ見物、お伴れの衆へ囁いて。

「よう観てなはれや、あのひとが、ク鐵砲疵クツていやはつたら、切通つまつて勘平がハラを突きまつせ」

鷹治郎ほどのものが、ソナナ一里芝居の場當りは探らぬ、兩者のセリフにかけかまひなくハラをきつたので、さすがの強打者も、ストライクアウト。

夜の音がいそがしい鷹治郎、勘平を買つた、め朝はゆつくりしてゐるが、六ツ目がしまるとモウ好子はんが来て顔をしてゐる。

堂嶋繁昌記——ついで六條少將、まな娘のお染の舞臺を覗くひまなく治兵衛が追ッかけてくる。



ぶたいの打合

ナゴヤゆきの狂言、最眞の訪れ、食事に風月、ひまがりさうで、脛をのばすには中途半端、ゆつくり扮くりをおとす間もない。

堂嶋繁昌記で長三郎、芳子と三人顔の揃つたところを「成駒家繁昌記」ツて叫ばれ、まくがしまるなり互に顔をみあはせて、わツはツはツとゲンキ潑刺。

長三郎「巧いこと言ふな……」

祝部鼎二といふひとは、いつ観ても華美な茶屋場が哀しいといつた——個々の肚の底を酌むでみるがらだ。萩本好は、二人喧嘩して一人は額を斬られ、ひとりはせつぶく、——刀でころされたりテツボウで撃たれたり、

エンの下で突かれたり、怖はいしばる……

腹をきつたり、と。

忠臣蔵は下の場も陰氣ゆへ、七ツ目にはばツとタングステ
ンが黠いたほど明るく演らうと魁車の平右衛門と福助のお
かるがケイコ場で相談。

おまちなかねの、おかるは始終せき
あげくの床は、文楽でさへホンな
美聲家は無いといふ、驚も顔負けし
さうな榮太夫が得意の正念場。

おオーカーアオーカーるウー
ーはアローア。がはりこみすぎ、
糸を下けたら低すぎ、辛度三度めに
巧く行つて「ウン、できた」

恰で、進物の判内。

世界三大ゲームの一として 兩半
球の耳目をあつむる早慶決勝の戈を
交えし二十二日の市川九團次は、舞
臺へでても上ワの空ラ。

役がすむなり、小走りにエレヴェターへとびつき、猿の
ごとくひとを掻きわけて六階のラヂオへ獅噛みつくつと逆轉



また逆轉 いま合戦の眞つ只中、アト數分を出でずして雌
雄を決するといふカンジンの要の大事のところ。
眼を細うし、耳を垂れ、動物エンの象のやうな恰好で聞
てゐるところへ右團次のへやから使が
きた。

猿狖た九團次、オノレのかづらを吉
三郎の鏡臺の上へかなぐり捨てて。
「こりやエライことになつてきた、一
寸行つてくるよつてラヂオを待たしと
くなはれ」
ラヂオが待つものか。

ことしは忠臣蔵の當りどし——、中
國、九州、東海道、京都、と三ヶ月う
ちつづけた新作の元祿忠臣くらが浪花
座へもどつて陣容を更め三日にフタを
あける。

大石役の壽三郎「……、士風の廢つた元祿に、臥薪嘗膽
の四十七士が吉良のやしきへ亂入して復讐をとげるのです

から、一言一句のいち／＼が人口に膾炙して……」
 魁車の弟子の魁童がきてゐて。

「エ、うちの親方が、どないかしてでだつたか」

勝田新左衛門の扇雀、セガレ主税の
 延太郎、カキヌキ落してキヤツ／＼。



かぶき座の一片に、片ツ端からひと
 さんのモノ真似をするカナリヤほど可
 愛らしい案内ガールがゐる。

不動直立の飯田さんの姿勢、将校の
 不動直立のごとき櫻井さんの勇ましき歩行
 ぶり、手をブラ／＼、いかにも邪魔く
 さいが。ツてな松井さんの出脚の形。
 獨逸から唯今キ朝てな住田博士、お見
 外れ申たのを、近視の故ではないと、
 S字型になつて胡魔化ス橋詰さんの身

振——、月曜遅参のあさ、雪の太股を大きな鉋蚊に刺れた
 海部さんの悲壯なおももちなんかは何れも堂に入つてゐる
 とりわけ、額に笑麿をうかし、小刻みにチヨコ／＼走り



の今村さんの小學生擬きの手ぶり身ぶりは蓋、傑作の最た
 るもの。



そのほか、常盤津文賀太夫といふお
 殿サマが。ダイヤの指輪を買に行つた
 眼つき。

おつむの上から、あいやの下まで寸
 ン分ンの中分ンなき、ソレは／＼賢い
 トキワズ綱太夫さまといふ日本人が、
 後家漁りの惚氣ばなし。

ツキ衿、スケ口、南大阪の名物山村
 のお師匠さんが颯つと金扇をひろげた
 腰の工合から、全身そのものが、キン
 グ、コンダの孫として輸出しても、か
 の映畫に勝るとも、劣るはづなき裏木
 戸の榮やんがママ食べてゐる粹な鉋形

は、目下ゴ研究中。

— 挿 繪 妹 春 平 三 —

クラブ美身クリーム

冬近し

寒さと肌アレに備へませう
一番よくきくアレ止めの化粧料
美しいクラブの美身クリーム



新？舊？八重子の立場

水谷 竹紫

與へられたる課題は「新派の八重子、舊派の八重子」と云ふ。

しかし、新派にも屬せず、また舊派劇團にも屬せざる八重子にとつて、此の課題は的なき的に弓を引かんとする、いさゝかナンセンスに近い困難があるのです。

申すまでもなく、八重子は舊文藝協會舊藝術座の系統より派生せる所謂新劇出身で、現に藝術座の名の下に劇壇生活を営んで居る俳優なんです。

そして又、藝術座それ自身は、新派とか舊派とかの差別を超越し、その所演方針も時代劇たる現代劇たる、洋劇たると舞踊劇たるを問はず、廣く汎く取り入れて、その演劇修業を遂げんとするものなのです。

但し、飽くまでも中庸本位で、所謂小劇場式な御先ツ走りの先驅劇でなく、さればと云つて新時代の機運に取り残されるやうな行き方でもなく、澤田正二郎君の所謂半歩主義（實は此の言葉も小生が常に澤田に談つて、澤田が常用したものです）を事實に於て實現して居るのは、更めて申さずとも皆様の先刻御承知の事だと存じます。

唯、更に附け加へれば八重子の芝居にはその生活態度の標語として常に念じて居る「淨く強く美しき」芝居が必要なので御座います。此の根本の主張を了解し取り入れて下さる方があれば、所謂新派人たる旧派人たるまた新劇人新興劇人たるを問ひません、誰方とも合同し聯合し、以て一歩半歩たりと

村田の聲色屋に「新國劇の辰巳をやつておくれ」と註文すると言ふ話を聞いて、大いに喜び、早速中座の樂屋に花柳、村田を訪問さうも御聲援に預りまして有難う」と感謝の挨拶に罷り出た、花柳は大の辰巳がびあきとて「こんな氣の好いチンドン屋ならいくらでも、ホントーの聲援

劇壇ニュース

◆花柳を訪ねて

辰巳の感謝

新國劇の人氣もの辰柳太郎は初日に先立ち十月十六日浪花座へ乗込んだが、中座の東京新派「女浦島」で花柳の藝妓春次が



右 中座の樂屋に花柳 辰巳の聲色屋を訪ねて

村田の聲色屋に「新國劇の辰巳をやつておくれ」と註文すると言ふ話を聞いて、大いに喜び、早速中座の樂屋に花柳、村田を訪問さうも御聲援に預りまして有難う」と感謝の挨拶に罷り出た、花柳は大の辰巳がびあきとて「こんな氣の好いチンドン屋ならいくらでも、ホントーの聲援

も劇壇の向上繁榮に寄與したいのが本願なのでございます。

更にまた、申すまでもなく、八重子はまた年少、修業中の人間ですから、先輩先覺の方々に親しく手を取つて教を垂れて頂くなどは必要で、小生としても常に熱望し懇願して止まぬところなんです。

此の意味から八重子は飽迄も謙讓であり、あくまでも眞摯なので御座います。近頃唱へらるゝ八重子が我儘だとか何とかは、八重子を利用しやうとしてそれが意の儘にならない場合に起る不平と、亦一面には私共の進路に對する一種の牽制策に過ぎません。

今春三月以來、偶然にも従來久しく結んで居た新派劇團との合同所謂新派大合同との聯合を解いて、更に新しい構成に基いた舊派の方々及び井上、藤村、柳一派の方々との聯合が出来ましたが、之れは主として松竹の新作戦であります、また一面には私どもの平素

の宿望がいくらか實現されたと云ふ悦にも接した譯なので御座います。

何故なれば、従來の新派大合同のみになつて居れば(過去數年間に新派の先輩から受けた恩恵は厚く感謝する所で、これを決して忘れざる譯ではありませんが)生活的にも藝術的にも或る意味の安泰はありませうが、ここにまた安逸になれて向上を失ふの嫌もないではありません。殊には八重子自身として未踏の藝域たる歌舞伎の藝境を垣間見るのよすがさへもありません。これは藝道の修業者に取つては頗る警戒すべく危懼すべき事柄なんです。

申すまでもなく、歌舞伎は日本の世界に矜る特技で、永い間の傳統によつて研究された藝境には頗る學ぶべき所が多いのです。よし今日それが時代の波に押されて、その影が薄くなる事があるとしても、藝術のエッセンスその物には俳優として藝術家として心得て置かねばならぬ幾多の尊いものがある譯です。

さばこれですな——と近頃嬉しい風景を展開したと云ふ。

◆警察本部の首腦

「警察官」に感涙

民衆と警察は常に此の非常時に當つて、尚よく握手されねばならぬ、それには警察官の任務と責任を徹底的に民衆に知らせる必要がある——と言ふ見解から、竹田敏彦作「警察官」上巻六場をプログラムの第二に上掲した浪速座新國劇へ、府警察本部の首腦部、植植保安課長、網島刑事課長、堀池事務官、藤原監察官に、清水警視ほか市内各署長貳拾名が十月十八日大舉して「警察官」を觀劇、植植課長は「僕は泣かされたよ、實際よくやつてゐるが、是れ程の傑作とは思はなかつた、警察官の職務がハッキリと描かれてゐるし、近頃の社會狀勢まで表現されてゐるのは、原作者と俳優の力だね」さ熱涙を浴べて激讚した。

◆「警官に是非見せ度

い」縣知事、粟屋部長の感激の言葉

劇聖と云はるゝ九世團十郎は先人の偉業たる「能樂」を垣間見る事に於て、歌舞伎の劇風に一味の生氣を吹き込みました。現代劇を主とする劇團に於ても、また先人の遺業であり完成された劇術である歌舞伎を探究する事に於て、自己の藝域を擴くし深くするの所縁となります。

かう云ふ譯で、今春三月以來の八重子は現代劇を生命としながらも、一面には歌舞伎的な所謂鬚物を習得し、舞踊にいそしみ、更に洋劇から糸を曳いた所謂新劇新興演劇にもその歩武を伸ばして演劇に於ける修養を完ふしたい宿願に着手した譯なんです。

國に二大政黨あり、鳥に兩翼あり、車に兩輪あり、腕は二本で脚も二本あればこそ、人間の胴體なり頭蓋骨は安定を保たるゝのでせう。

片腕を失つて片輪となつた小生は、つくづく人體の安定と云ふものが、左右均整によるものであることを痛感しました。一腕を失つ

た事は決して單に手近な動作の不自由とか不便とか云ふばかりではありません、小生の不幸はそれよりもつと意味に深い、もつと奥底の、つまりは小生の肉體を自身に於ける安定を缺いたと云ふ點にある事が近頃になつてしみるゝと感得されました。

劇術の事を小生自身の肉體に類推するのはいさゝか變ですが、俳優のたしなみ修業も、決して一本立では行かないものだと思ひます。少くとも二本の脚、いや三脚四脚、それでこそ、ほんとうに偉大なる藝術を築き上げる基礎工事だと思ふのです。

そのむかしは一藝に深く突入すればそこに名人たるの道が拓けると唱へられたものでした、蚤の眼をのみ専心研究してそれで博士になるのが偉いとされた時代もありました。しかし今日ではそれは通用しません、それらの教訓はもう時代錯誤です。時代は複雑となり専門が分化されゝばされるほど、そこに「綜合」と云ふ事が尊くも亦重要な意義を備へて



警察官「官警署」演出術師高知、白井會長の影

山本内務大臣をして「國民必見の芝居」と激讚せしめた新國劇の問題の「警察官」劇を上演したる浪花座へ昨二十日縣知事粟屋警察部長、今井警務課長、菊池特高課長、松岡官房主事、

田村島之内、上田船場の兩署長外拾參名のお歴々が松竹白井會長の招待にて觀劇、治安維持と人命保護に四六時中その身を命を擲打つて盡す警察官の活躍、並びに日常生活、しかして現世相の混沌たる状態まで描き盡した

参ります。

古来の藝術家は、それが偉大なればなるほど綜合の眞諦を悟入して居る様です。早い話があの大沙翁、これほど綜合の妙を極めた作家はあまり類のない事と存じます。

多岐多端な散漫なる道樂、スカッターブレーションは、なる程警戒し排除しなければなりません。計劃あるシムテムのある擴張は決して否むべき事ではありません。專制的な一本調子のフアツシヨニズムは國を危くするの基、融通變化自在の千手觀音菩薩は何と云つても近代藝術家の尊むべき神様佛様でなければならぬと存じます。

とんでもなく脱線して肚要の紙數を費して了りました。狼狽してこゝらで要約しませう。つまり私の云はんとした處、本誌の課題に答へんとした要點は、

(イ) 水谷八重子と云ふ俳優は、新派人でも舊派人でもない、文藝協會藝術座

系統の新劇人である事。

(ロ) 従つてその劇術流風も、その何れにも偏しない、イヤむしろその何れをも習得し體驗するのが現在の立場であり修業である。

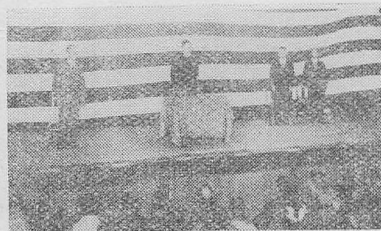
(ハ) 之れが爲には、新派舊派の先覺先輩に對して、あくまでも謙讓と眞摯とを以てその教を受くる事に努むる事

(ニ) 更にまた同輩儕輩に對しては、各系統に何等差別を設けず興行者の作戦に基き、志を同ふする人々と合同出演する事。

と、云ふ事になりませう。

今回の「お夏清十郎」これは或る意味から云へば「歌舞伎」ではなく、嚴密に云へば新劇に分類すべきもの、「酒中日記」魚河岸の朝」これも亦現代劇とは云へ、所謂新派劇とは趣の異つた別種のカテゴリーに屬すべきものである事は申すべきものではありません

警察官劇に感激の喝采を贈り、緞帳が下りるや、白井會長の案内で舞臺に上り、
「實に感心した、當局者としてこの劇の上演を心から欣ぶ」と感謝の辭を野村、島田、辰已依藤理事等一同に與へ、休憩室



招待警察官氏に並ぶりよる星屋察長

に打寛いだ知事等の一行は「民衆が警察を識る最もよき芝居だ」「警察官もこれを見て、發奮するは勿論、反省すべき點さへ多からう、ぜひ皆に見せてい」と語り最終の「新蔵兄弟」の閉幕まで熱心に見物した。

「椿姫」は外國種であり、また事實洋装した外國物であります、私は飽くまでも之れを日本の演劇として取扱ひ、また日本式の演出によりました。

これは在來の翻譯劇が、その國の劇風を移し植ゆるのとは大に視ひ處が異つて居るのです。

在體に白狀すれば、小生曾つて渡米の際、紐育で、一日ウエデキントの地靈(ルル)をベラスコの演出で拜見した事があります。

するとそれが恐ろしく米國式なんです、すべてが米國人の趣味尙好に適する如く演出されてゐるのです。地靈原作たる獨逸風の趣はトントどこにも見當りません。

しかも尙、舞台藝術としては立派に完成されたものなのです。

私はハタと手を打ちました。「これだ!」

「これだ!」と思ひました。

取材は外國種でも何でもよい、原作は佛國でもよいが、その表現はあくまでも日本の舞台なら日本風にやつてのける、之れこそ本當に日本の劇の取材範圍を擴張して、しかも一般觀客の共鳴を得る所以だ……と。

以來久しく心に密めて居た作戦を、脚色者たる音羽六藏に談り、その演出方針を決定しました。そして數回の上演經驗の上に、その信念の誤でなかつた事を確認したものでした。

従つて此の劇を御覽下さる各位は、在來の翻譯劇洋服劇と云ふものから全然趣を異にした、矢張り日常我々の目に耳になれた日本の芝居として御鑑賞下さる事を御願する譯なので御座います。

いろ／＼取とめない事を羅列して恐縮に存じます、あしからず御推讀を願ひ上げます。

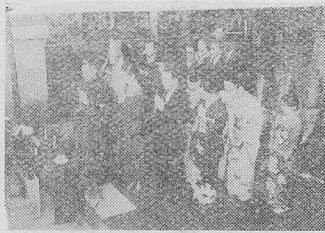
(一九三三・一〇・二九)

◇八重子龜藏等

幹部連が打揃ひ

西鶴の墓參

十一月の歌舞伎座各派合同劇の演し物「お夏清十郎」劇に因み去月三十日同劇の主演俳優水谷八重子(お夏)市村龜藏(清十郎)を始め伊井友三郎、澤村田之助 村田嘉久子、東日出子、



てに前墓の鶴西
氏諸の子久嘉、助之田、郎三友、願龜、谷水

米津左喜子、西條靜子等の諸星は午後一時半歌舞伎座に集合し自動車を連れて同劇の原作者井原西鶴の墳墓のある上本町四丁目誓願寺に參詣、午後二時半より墓前に於て住職の讀經について各優は懇ろに焼香した。



田中絹代



岡譲二



川崎弘子



竹内良一



岡田嘉子

蒲田未曾有のオール・スター・キヤスト!

大阪・東京

朝日新聞連載

原作

久米正雄氏

監督

野村芳亭

沈黙の花

松竹サウンズ版

八重子打どけばなご

水谷 八重子

時 間

この十月はどう云ふ風の吹廻しか、東京の芝居が一番目だけの出演で、六時にはもう身體があくと云ふ始末、かう云ふ事はこの十幾年になかつたので、それはそれは痛快に駆け廻りました。

歌舞伎、東劇、新橋と各座の芝居はもとより、淺草や築地、さては早稲田講堂に於ける森さんや加藤さんのハムレット劇まで見學すると云ふ勉強振り、いやそればかりではない、あの本も読んで、此の催にも出席してと無暗に慾張りましたら、さあ、却つて時間不足、どうにもかうにもならなくなつて、御約束の時間の借が大變に出て了ひました。

貧乏人が大金を拾つて暫時の成金振を發揮した後のように、持ちつけぬ時間の餘裕を濫用して了ひましたので、

却つて大變な事になつたのです。

|| 時計なんか滅んぢまへ ||

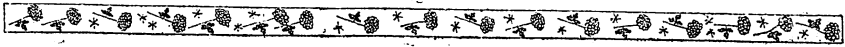
と、私は忙しいとき、時間に急ぎ立てられるとき、いつもかう叫ぶのですが、やつぱり今月の末もかう愚痴らざるを得なくなつて了ひました。

此の原稿だつて出發前のほんの寸時を泥繩式の走り書なんでもものの……。

矢張り私は忙しい方がよい、もちつけぬ時間なんか、やつぱり持たない方がいゝんですね。

水 滑

此の九月は神戸と京都だけで、梅田驛を二度も通過しながら、御立寄りする事が出来なかつたのは残念でした。何も私が悪い譯ではない、興行上の都合で、松竹本社、の御指圖に従ふだけですから、こちらに責任はないんで



芝居十句

(その一)

町人に秋風樂の芝居かな
 白菊に立てば大阪成駒屋
 秋風に紅絹の幟はむかしかな
 なかくに幾秋繼ぎし紅葉かな
 芝居見の明けかゝるなる秋の霜

入江來布

すが、それでも何だか悪い事でもして居る様に、梅田驛に列車が停車して居る間は小さくなつて居たものです。しかし、今月は大威張で堂々と朗らかに梅田驛を下車いたします、そして何の遠慮もなく先づ歌舞伎座のスケート場へ闖入いたします。

スケートと云へば、東京の山王俱樂部でウント勉強して、此の春以來御馴染の方々を驚かして上げる積でしたが、矢張り例の時間濫用の一件から、肝要のスケート勉強が碌々出来ませんでしたので、一寸氣引けます。今一ト月、東京を打ち続け大にスケートに練達して下

阪する積でしたのに、さうは可けないで吐られましたので、否應なしに参る事となつたのです。

すると、まあどうでせう、大阪の新聞には、八重子が眞面目に、大阪行を拒んだなんて書いてあつたさうです。ね、これぢやウツカリ戯言も云へない事になりますね。

トニカク、今後こそは大に滑ります、そして大に練熟して、聴ては女性の選手權に野心をもつやうになるまで勉強します。

全大阪のスケートファン諸君、八重子が如何に巧に、いや如何に拙く、いや如何に變挺にいや如何に貧弱に滑

るかを見に来て下さいませ。

芝居

え、何ですつて、芝居をしに来るのではないのかつて
オー、さうさう、さうでした。本職は芝居です、十月の
東京の埋合せに、今度は晝の部の半から、夜の終演まで
殆んどデズツパりに働きます。スケートもスケートです
が、芝居はより以上に活動する事は申すまでもありませ
ん。

全大阪のスケートファン諸君、

スケート場の八重子を御覧下さつた以上は、是非とも
舞台の八重子も御覧下さる義務があり責任があります。

あんまりスケートの事ばかり申すと、また叱られます
から……これは是非是非、痛切に御願いたします。

さうでない、スケート場に行つちや可けないなんて
叱られますから。

それから今一つ、今度の八重子の舞台は従来とはいく
らか異つた趣を御目にかける事が出来ると存じます。

「酒中日記」にせよ「椿姫」にせよ、之れまで度々手にか
けたもので御座いますけれど、従来の新派大合同で演じ

ました時分とは、いさゝか心構が違ふと存じます。

勿論脚本の性質も異なるので、それは當然過ぎた當然で
すが、それ以上にいさゝか所期するところがあるので
それが何で御座いますか。

こゝでは申しませう。

御見物に来て下されば、はゞあさうかと直ぐに御合點
が行くかと存じます。「お夏清十郎」の演出、これは此
の春三月以來、つまり只今の新座組、新方針、新たに附
け加へられたわたくしの營業科目で、巧い拙いとはか
くこれまでもの八重子とは全然變つた趣と申す事が出来
ませう。

と、申したところで、實はまだほんの練習中で御座い
ます、決して自らどつのかうのと云ふ域には達して居り
ません。けれど、どうぞ「拙いから止せ」なんか云はな
いで下さいまし、その内にはキツト巧くなります、巧く
ならないでは置きませう。

今拙いからと云つて、演らないで居ては何ともなりま
せん。零はいつまでも零で御座います。たとへ、その價
値が今は僅に一點でも二點でも、演つてさへ居ればその
内には八十五點となり百點となる機会があります。



どうぞ、そこを御酌取り下さいませ、よしや、私は拙くとも、一座には、その方面の名家が居られます、龜藏さんにせよ、田之助さんにせよ、村田嘉久子さんにせよ是等の先輩の方々は、何れもかうした芝居のエキスパートですもの、御一覽の價値は十二分に存在します。八重子は決して嘘は申しません、もし嘘だと思召すなら、實地檢證に御入場下さいませ。え、ドツチにせよ来て見ると云ふのかつて、え、さうです、どうぞドノミチ来て頂かなければならないんですもの……………

仔犬

井上先生は、やつぱり今度も名犬フミさんを御連れになる事と存じます。私の内のシエフアードは此の夏死んで了つたので、伴ふにも種がなくなつて了ひました。去年の春はフミさんの仔を寶塚につれて参り、可なり大切にした積でしたのに、不圖した事から矢張り了ひました。どうして私のところには犬が育たないのでせう。子供のときから、手にかけた仔犬の數は何十頭にも及

芝居十句
(二のそ)

道頓堀
看板をあげて更けたる秋の霜
思ひ出の芝居すゝろに宵の秋
地芝居のおもひ出さるゝ藝題かな
人形讚
文樂のお三輪お七が夜寒かな
姿繪に役者相撲も暮の秋

入江來布

んだのに、今では一匹も居りません。母や姉は、内では駄目だから當分犬は止ませうと申します。

しかたがないから、私も止しますと申しては居りますが、矢張りワンチャンが居ないと寂しいんです。

シエフアードも好きですが、私はボストンテリアに心が惹かれます。先年飼つて居たビーターは（之れは私の飼つて居たボストンテリアの名です）それはそれは可愛いらリコウな犬で、しかもその風貌は額の廣い折撃者ブラントンのやうな感でした。暑いときは私の夜具の上に眠り寒いときはいつも夜衣の中にもぐり込んで来たものでした。一緒にお湯に入れてやりますと、湯槽の椽につかまつて、例の大きな眼をキョトキョトしながら、後足で泳ぐまねをしたものでした。

そのシカツメラシイ顔でチンチンをしながら御菓子をねだる格好と云つたら……

あゝ、矢張り犬が居ないと寂しい。

どなたか、この大阪滞在中、可愛い小犬を借しては頂けませんまいか。

宿屋では嫌がるから可けないつて、困つちまうわねえ

それなら犬の玩具か、寫真で我慢させよう。皆様!!

甚だ勝手な我儘を申してすみません、もし、御手許に

珍らしい犬の玩具か御寫真でも御不用なのが御座いましたら、どうぞ此の犬狂の八重子に御寄贈下さいませ。何を頂戴するよりも大變にありがたう存じます。

(一九三三、一〇、二九)



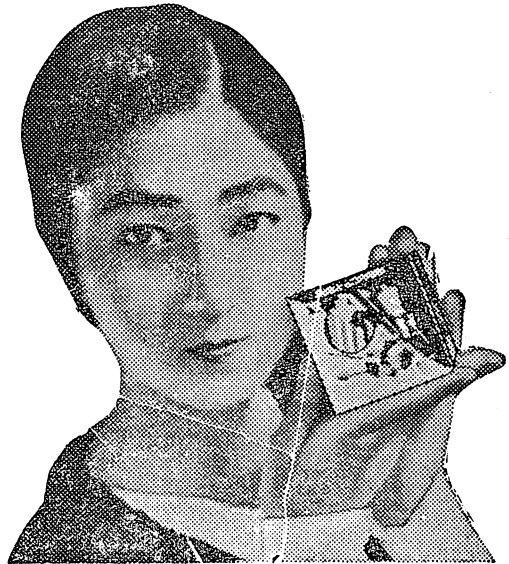
御愛藏の書畫幅や
書籍箱等に二三袋つゝお入
れになれば虫害の虞はござ
いません

百七袋入 四圓 内地
手五袋入 貳圓 送料 拾四錢
二十袋入 八十錢 同 拾錢

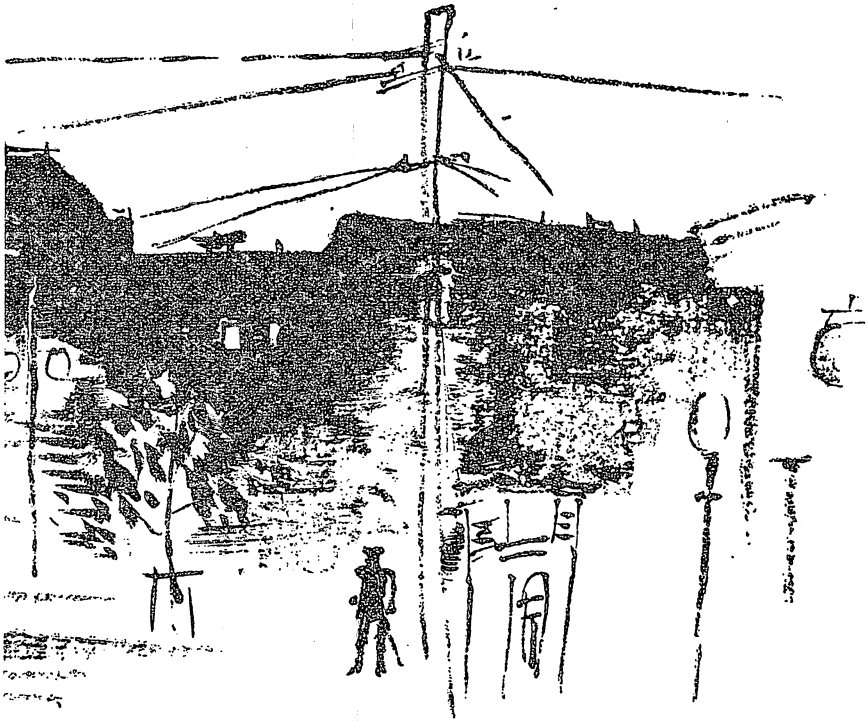
京都市寺町姉小路角
鳩居堂
振替大阪六三八

化粧は創作

鼻筋へ、すうウと一本引いた白さ
それだけでも明るさが冴えます。
頬・額・顎・襟へののびる美しさ
それは一つの創作美です。殊に
手間もかゝらず、苦心も要らず
すなほなノビと平らなツキで
此創作が、いかに容易に完成され
るかを、せひお試し下さい。
化粧美は只爰にあるのみです。



千々三三白粉は御園



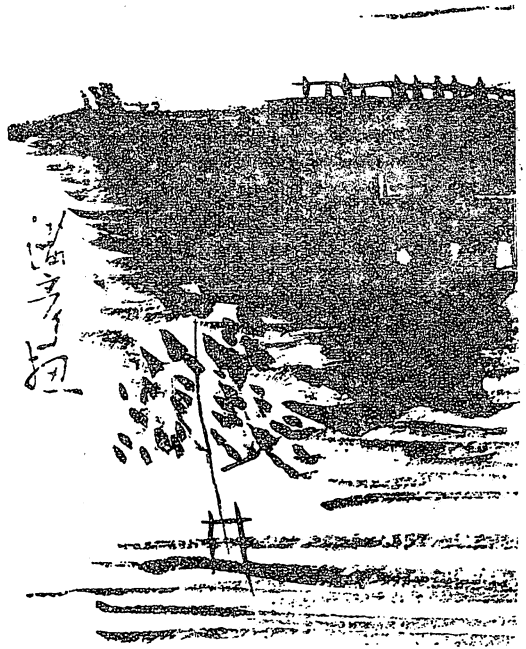
小説

受難の一夜

柳 永 二 郎

「どうも飛んだ失敗を仕出来て了ひまして、なんとも申譯け御座いませぬ。無斷で芝居を休むなんて事。私今日まで、もう役者になつて十何年、一度も無かつたことなんですが、本當に取返しつかないことをしてしまひました。お許しを願ふにしても、譯をお話しなければ分つていたどけないでしようから、昨夜の出来事を詳しく申上げます。どうかそのまゝでお聞きになつて下さいまし。

實は昨夜、芝居を出まして、女の家へ行つたんです。え、公園裏の新菊の家つて藝者家なんです。女と差向ひで一本呑んで、女の三味線かなんかで、私が小唄を三つ四つ唸つてゐたんです。ふざけやがつてとお思ひになるでしょうが、こゝからお話しないと、私の氣持ちが分つていたどけないでしようから、どうか我慢して聞いて下さい。もう十二時を廻つてゐたでしょう。そろ／＼寝ようと思つてゐる時分でした。私に電話だと階下から呼んでゐます。出てみると梶川さんと云



ふ——座長は御存じないでしょうか——
よく樂屋へも遊びに来るお客さんです。
九州の金持ちの息子で、叔父さんが重役
をしている△△生命へ、大學を出るとす
ぐ這入つたんですが、社の方は、毎日一
寸顔を出して、後は大抵、社が銀座のデ
パートの八階に有る關係で、銀座裏のカ
フェーに入り浸つてゐるといふ仕末の、

といふ女給は私も一寸好きでしたし、芝
居へもちよい〜見に来たりして、私も
あはよくばなんて気持ちもあつたんです
満喜子の方には、梶川さん自身が大いに
野心があつたんでしよう。でも、私にし
てみれば、其場合餘り氣も進まなかつた
んです。着物を着換えることだつて面倒
だといふ位の氣持ちでした。それを寢間

吞氣な身の上の
お客さんです。
それが、今、ベ
ニスエの女給—
千恵子と満喜
子を連れて宮戸
座前の改正道路
の自働電話まで
来てゐるんだか
ら私に直ぐ来て
くれと云ふんで
す。この千恵子

着のまゝでもいゝからと云はれて、其上
千恵子が電話口へ出て、是非来よう
云はれたんでは行かない譯に行きませ
ん電話ですか。え、前に梶川さんは、こ
の私の家へ遊びに寄つたことも有り
ますし、女だつて知つてゐるんです。そ
れでよく私が居ない時でも電話をして來
ることは、これまでも度々あつたんで
す。ですから昨夜もちや一寸行つてお
でなさい。と女が云つた位なんです。ガ
ーゼの浴衣に久留米緋の袷を重ねて、素
足に兵兒帶です。財布も帽子も持たず、
煙草とハカンチを持つて、直ぐ歸える
からと、雨上りの道が少しぬかつてゐま
すので足駄をはいて出かけました。
公園裏の交番の眞向ひで、宮戸座の横
町へ這入る角の自働電話の所に、梶川さ
んと女二人が待つてゐました。梶川さん
はゾロツとした着物に、大島かなんかの
袴をはいで、フェルトの草履といふ扮へ

です。女の方は二人とも、歸り仕度をして小さな風呂敷包みをかゝえてゐました。「何處か知つてる待合はないかい。」

「さア此近所ぢや——それに知つてる家は、後で都合が悪いから、その邊を歩いてみて、上げさうな家へ行てみませう」「うんそれがいゝ。酒が醒て來たから、どこかへ上つて呑みたいんだ。千恵ちやんいゝねえ。」

「えゝ何處でもいゝわ。お附台するわ、——ねえ満喜ちやん、いゝでせう」

「でも、妾、あんまり遅くなるとお母さんが心配するから——。」

「まあいゝさ。折角、山本君も出て來たのに、逢つたばかりで歸えるなんて云ふなよ。」

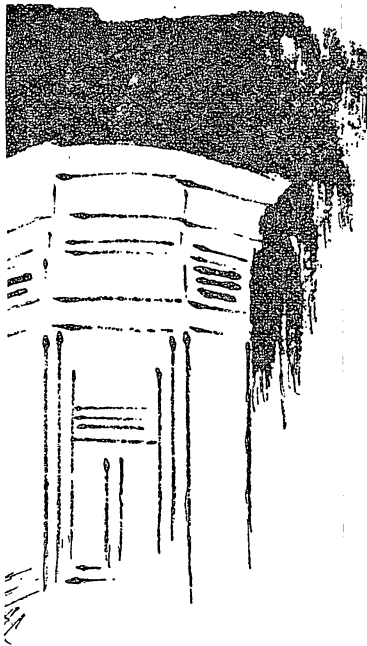
そんな工合で歩いてゐる中に、あまり立派でない家が、表の戸を開けて客待ち顔にしてあるのを見付けて、二階の座敷へ通されました。なんにも出來ませんが

とにかくと云ふので、塩豆かなんかでお酒を呑み始めました。千恵子の方はどうして仲々よく呑みます。満喜子の方は本當に呑めないんでしよう。でも初めのうちは、馬鹿話で、まあ三人で七八本も呑んだでしようか。私もだいぶん酔つて來ました。すると梶川さんが

「酔つたから寝かして貰をう。千恵ちやん、君も山本君と一緒に泊つて行けよ」と云んで、自分はまだ廊下を隔てた部

屋の何時敷いたのか、もうちやんと枕元におひやなぞの置いてある蒲團の上にひつくり返つて了つたものです。すると満喜子が急に泣き出しさうな顔をして、

「山本さん、後生だから、私達今夜歸えらしてよ。妾、勿論泊るつもりなんかで來たんぢやなし、千恵ちやんは、あんたが好きなんだから、又、今日でなくても逢えるんだわ。妾は本當に困るの。だからあんたから梶川さんにうまく云つとい



満喜子

てよ。今夜は歸えらしてね。妾、お母さんが心配するから、千恵ちゃんに送つて貰うわ。」

千恵子も共々今夜は歸えらなければならぬからと云ふんです。私も二人の手前、いゝ兒になりたくもあり、家で女が待つてゐることも思つて、ぢや歸えり玉へ、後は僕が引受けたからかなんかでソツと二人を外へ出して了ひました。

「二人とも歸えつちまひましたよ。梶川さん、あんたどうします。」

「歸えつた——まあいゝや。ぢやこんに寝かして貰ふから、君は。」

「僕は歸えりませよ。すぐそこだもの。ぢや、明朝起しに來てあげませう。」

私も外へ出ました。そのまゝ花屋敷の裏の方へ出て眞直に歸えつて了へば、なんの事もなかつたんです。それを、二人はどうしたらうといふ一寸した助平根性を出したのが、そもゝ間違ひの始りで



す。反對に一寸廻り道になるのを承知で米久の前から改正道路の方へ出たんですと豫想通り二人が未だマゴ／＼しています。

「どうしたんだい。自動車ないのかい」

「いくら待つても來ないのよ。」

「ぢや、そこまで來たまへ。僕の乗りつ

けの自動車屋があるから。」

不二横町の角の不二タクシーまで行くつもりで、先刻の自動電話の前を通つて不二タクシーの四五軒手前まで來かゝりました。

「オイ、オイ、一寸待ちたまへ。何

處へ行くんだね。」

その暗い路次の中から、ガチャリとサーベルの音をさせて、巡回の警官に呼び止められました。瞬間にまたと思ひました。と云ふのが何しろもう夜中の二時を廻つてゐますし、女給を連れてゐるといふことが非常に不利な立場だと思つたものですから。でも逃げられもしません。

「此人達を送つて行きます。」

「何んだ、その女は——」

「藝者です。」

藝者ですと云つたのは、女給だと云ふよりよからうと突差に思つたからなんです。それに私の女の家を抱えが二人居るもんですから、その抱えだと云はうと思つたんです。後で考へると本當に馬鹿げたことなんですが、其時は全くそう思つたんです。しかしその最初の一つの嘘がとんでもないことになつて了つたんです「藝者？ふうん、何處の藝者だ。」

「浅草の藝者です。」

「へえ浅草にこんな藝者が居たかなア」

「え、新菊の家の抱えです。すぐそこです。今送つてやる所なんです。」

「オイ嘘を云ふなよ。」

「嘘ぢやありません。」

「嘘でない。よし、ぢやとにかく交番まで来い。嘘だと云はしてやるから——」

なんだか非常に自信あり氣な語調なので少しタヂ／＼としましたが、騎虎の勢ひで仕方がありません。

「え、参りませう。」

「よし来い。」と云つた警官の聲には怒りの調子さえ有るんです。女達はソツと私の袂を引いたりして、心配らしい顔を向けてゐましたが、警官が、ドン／＼歩き出したので止むなく後をついて行きました。交番まで行くと、そこに立番をしてゐた方の警官に、女二人をあづけて、私だけが中へ連れ込まれました。

「オイ、浅草の藝者が、自動車で来て、お前を呼び出したのかい。あの自動電話から——。」

さう云つて指さしたガラス戸の向ふに先刻、梶川さんの掛けて来た自動電話が有るんです。もう首ねつこを押えられたも同然です。

「すみません。嘘でした。」

「太い奴だ。」

大きな手が、ビンタを一つ喰はせました。しばらく私も無言で痛さと、今の立場とを考へていました。そしてきように謝つて了をうと思つたんです。

「すみません、藝者ぢやないんです。實は銀座の女給です。けれど女給だと云つたら、うるさからうと思ひまして——」

「うるさいとは何だ。」

「すみません、いゝえ、まあさう思つたものですから——でも別に何も悪いことをした譯ぢやないんです。悪いことをし

てゐるんなら、今時分こんな所を歩いちやしませんでしよう。」

「歩いてないで、寝てゐると云ふのか」と云ふような譯で、女が二人調べられたりして、なんと頼んでもとにかく署まで来いと云ふので、象潟署の門をくどりました。地下室のような廊下を行くと、突當りの磨ガラスの戸を明けて、そこにある他の警官に、

「君、嘘つき野郎を連れて来た。頼むよ」
雑作なくたの警官に渡されて、自分は歸えつて了ひました。薄暗い電氣に照し出されてゐる物は、兩側に並んだ金網の張つてある、牢屋格子の入つた部屋です。女二人のうち、千恵子の方は、覺悟を極めてしまつたんでしよう。

「山本さん、あんたが餘計なことを云ふからよ。」

署へ来る途中でさう云つた限り黙つて了ひました。満喜子の方は、泣いて居ま

す。

「私、今夜もし歸えれなかつたら、あの人に捨てられるわ。」

と、なにか情熱的な泣きようをしてゐます。これは、今、ぶた箱を出てから聞いたんですが、満喜子の男といふのが、流しの圓タクの運轉手をしてゐて、毎晩二時頃に歸えつて来て、すこぶる灼熱的な戀仲なんださうです。昨夜歸えらなかつたので、今日は命がけでなければ家へは歸えれないつて、今も、警察の門を出ながら、また泣かれたので本當に困つて了ひました。それはとにかく昨夜の續きですが、私が一番先きに、身の廻りを調べられて、兵児帯を取上げられて、帯ひろはたかで、

「さア〜こゝに這入れ。」

とほうり込まれたのが、少し曲つてゐますが八疊程の部屋です。そこに足と足を重ねるように後先きになつて十人程

の先客がゐました。その中で、やつと身を横へ得る程の空間を造つて横になりました。なんだか夢のようで、留置所なんて生れて初めての経験なので、夜の明けまで、マンジリともしませんでした。

その間、遠く女のすゝり泣く聲。なにか地の底からのようにポツ〜と話す聲。其聲を叱るのらしい警官のかん高い聲などを聞いてゐました。

今朝になつて、皆起されて、部屋へ小さな箒が投げ込まれました。馴れた様子で掃除をする者、不気味な目つきで、お互ひに探るような無言の針のある態度の者。そのうちに朝めしが運ばれて、金網の戸の差入口から、不揃ひな辨當箱が入れられました。長いや短かいのがある箒を束にして持つてトン〜と床で堅にたいて、一方を揃えようと、不揃ひの方の上に飛び出してゐる方から一組づつを抜き出して、その箒を配つてくれる者などが

あります。

やつとお書近くから、一人々々呼び出されて、お調べがありました。

「二十五日だよ。高え、たけえ」なんてブツ／＼云ひながら歸えつて来るものもあります。

そのうちに私の番が来ました。調べるのは署長さんでもあるんでしょう。およそ警察なんて云ふ嚴かな気分とはかけはなれた和やかな態度です。

「あんまり世話を焼かせないようにしてくれよ。女給なんて連れて歩くのはよくないよ。女給はカフエーで見るもの、役者は舞台で見るもの、さう云ふことにしていて貰はないと、こつちも忙しいんだから——氣をつけ玉へ。」

思はず頭が下りました。涙が出て来るんです。すみません／＼と云つてる中に舞台のこと、時間のことが氣になつてゐたんですが、それから色々の手續きがあ

つて、やつと今、出して貰つたんです。本當にすみませんでした。もう私が出る幕も半分以上済んで了つたんですから。

許していただけないかも知れませんが、こんな事情です。今度だけは許して下さい。私にとつては、いゝ経験かも知れませんが、面白くもない話を永々として、お仕度のお手を止めて申譯御座いませんでした。」

—一九三三—一〇二七—

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ウキスデキ
ブラモンド
ベールモツト
キユラツト
ペルミント
ジバミント
滋養葡萄酒



元 發 賣

横山商店

株式會社

大坂市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六一
三〇六三
四六四九

娘賣花と「街春青」

郎 一 陽 脇 門

○ 劇團「享樂列車」。

前世紀的な關西劇團に、しやく熱し
きつたジヨウキをポツポと吹きあげた
だけでも、たのもしい。

○ 野淵運轉手。
なかたしやせう
中田車掌。

よきコンビであると共に、この二人
常に、頭のとつぺんから湯氣をふいて
ゐる。さすがに「享樂列車」のリーダ
ーらしい。(但し毛がうすいといふシ
ヤレではありません、この點兩氏のた
め特に申添えておきます。)

新興キネマの「青春街」を享樂列車
でやることになつて、脚色のオハチが
ボクに廻つて來た。フンパツして書き
出したが、まだ發車に間があるのに、
中田車掌からまだか〜と矢の催促だ

もつともこれには譯がある。九月、初
發列車編成に際して、一冊書約束で
一ト月ほど前から引受けておきながら
例に依つてまご〜してゐるうちに、と
うたう乗り遅れてしまつた。中田車掌
初めてのことであり、朗かにコウフ
ンして、ボクの姿も見ずに、發車のベル
を鳴らしちやつたんだから助からな
い。

だからこんどはギリにでも乗ツけて
やらなきや可哀想だと思つてくれたん
だらう。それにボクは發車間際になる
と、よくハライタを起したり、テンカ
ンを起したりするので、至極厄介なん
デス。

○ 作者テンカンと云ひましてね。

が、とにかく、此度は間に合つた。
ボクの「青春街」には入江たか子扮
するところのルミ子は出て來ない。ル

ミ子を出すと、けんらんさに於て満點だが、時間の都合で、そこ迄手がとどかなかつた。ボクはルミ子よりもカレンな花賣娘光子の姿にひどくひきつけられた。舞台一杯に切りたての花の匂ひをブン／＼さしてやらうと思つて、どこ迄も光子中心の「青春街」に始終した。

都會叙情詩。

少女小説じみてセンチなボクの「青春街」。あまい「青春街」。

かつてボクはルネ、クレールの「巴里祭」を家庭劇のために脚色した。あれにも一人の花賣娘が出て来る。しかしバリの花賣娘はよく聞くところだがニツボンと花賣娘とは、どうもピツタリしない。近頃の事はよく知らないが東京にだつてあんまりないだらう。

ギンザの夜會で、白系のロシヤ婦人がおぼえたてのあやしいニツボン語で、

「ハナ！ハナ！」

と呼んでゐるのを二度見かけた事がある。

ニツボンの花賣りは、水鼻をたらし小娘か、鼻の先を赤くしたかみさんか、

「花はどうだね。」

とやつてる位なものだ。

ニツボンにも花賣りらしい花賣娘が一人や半分出たつていゝ時分ぢやないか。

「巴里祭」を書いた時、何處かにそれらしいものが出てゐさうな氣がして、一日大阪中をとび歩いて、ガツカリした。夕刊賣りの小娘なら、ざらに出てゐるんだが、いくらボクが物好きだから

つてまさか夕刊屋に戀をする氣にやなれないからぬ。

「青春街」の上演にちなんで、光子のやうなカレンな子を、街頭へ送り出さうぢやないか。

きつと賣れると思ふんだが。

ジョウジのやうな青年が二三人ゐてくれたら、しめたものだ、花賣りだつてバカにならないぜ。

第一ウエートレスなんかより、はるかに近代的で、しやれてるぢやないか

だが、大阪で出るとすれば、どこだらう。

先づ朝日ビルの前あたりか。

明るいガラスのビルディング、千疋屋のショー、ウインドをうしろに、可愛いワンピースかなんか着て、左手に抱えたあけび(?)の籠に、かほりの高

い季節の花をもち込んで——一寸、うれしい近代風景ぢやないか。

どうとんぼりや心齋橋の、どこに近代がありますか。

殊に心齋橋筋のシヨ、ウインドと來たら、かなしくなりますね。いつそどうとんぼりへ出て、芝居のやぐらでも仰いで、昔の大阪の夢でも描いた方がい。

こゝ迄書いて、ニッポンにもりつばな花賣娘のゐることを思ひ出した。京の大原女がそれだ。

あたまたに季節の花をつけて、カスリのつゝツばに、手甲脚絆かなんかで

「花はいりまへんか」

と賣りあるく。

ニッポンらしい好もしい風景だ。

ニッポンの花賣娘は、桃割れかなんかでないかと、どうもピツタリしない。

「青春街」が、どの程度迄客にアツビルするか。街頭の花賣娘を、観客がすなほに受入れてくれるか、どうか。ボクとしては、それが尠らず氣になる。

花は剪りたて。果物もぎたて。

コーヒーはいれたて。鬼も十八、番茶も出花。

なんでも、かでも青春萬歳だ。

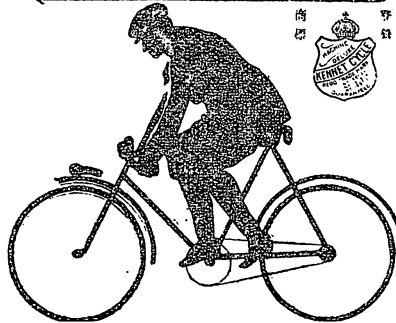
そいつを通り越すと、花も匂ひがうすくなり、果物も味が變つてくる。女だつて次第にしよツばくなる。

しよツばい女は食ひ飽きた。

清新だ。青春だ。

青春萬歳だ。(八、一一、一)

ケンネツト号



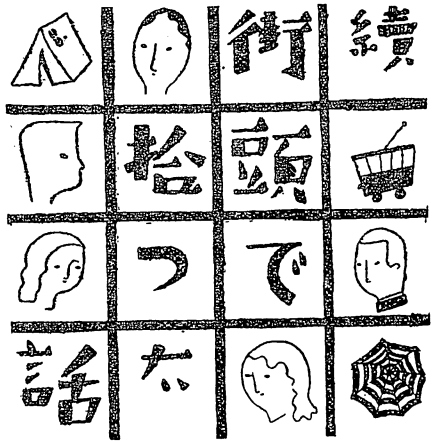
西人愛好の 撰良車
國産品中の完璧 是非御愛用を

市内特約店ニアリ

株式会社 大澤商會

京都市三條通小橋西





曾我廼家十吾

◆兒童虐待防止法

秋雨が冷たく頬を打つうすら寒い夜の十時過ぎ……………。

華やかな五彩のネオンを浴びて、歡樂と愉悅のさんざめきが、軽いステツブに乗つて、人の波が流れる新世界の濫泉横丁から、公園地の暗い方角へ、小売店員に追はれて逃げるみすばらしい十

歳そこゝのルンペン幼年が、私しの前で、何に躓つたのかべつたりと倒れました。小売店員は得たりとばかり、馬乗りになつて……………。

「こらツ、泥棒め……………ちよつと油断をしてゐる間に、早い事やりやがつて、此のくそツたれ奴……………」

情け容赦もなく鐵拳の雨なんです。見兼ねた私が、「まあ〜」と、殴ぐる小売店員の手を止めて諍を聞きますと、此の幼年には両親がなく、天王寺公園を安住のベッドにして、新世界の活動街や、飛田附近を稼ぎ場に、マツチや辻占を通行人に押し賣りしてゐたのを、當局の兒童係りに發見しられて保護所へ入れられたが、幼年には規則的な生活が窮屈で辛抱ができません、二三日前に苦心をして逃げ出し、戀しい古巢の天王寺公園へ歸へつて来たが、錢はなし

その上、今まで物賣りの資本を貸して

呉れた親方も、兒童虐待防止法で、やられるのが恐ろしいのか相手にしてくれず、此の二日間、水ばつかり呑んで何一つ喰つてゐないので、悪いと知りつゝキャラメルを盗んだ……………と、云ふ譯なんです。子供心にさも不平らしく……………。

「辻占を賣らしてくれたら、こんな事せいへんの……………」

悲し相に泣きじやくり乍ら訴へる言葉を聞いて、成る程、こふした子供は、働くにも、遊ぶにも、此の天王寺より他を知らず、野育ちに大きくなつて来たが、救護を目的の兒童虐待防止法もこんな子供達には有難迷惑であるようにさへ思はれました。追つて来た小売店員には、そうした子供可哀想な氣持ちも察しられず、クナんかしやがンネン、文句云はんとこツちへ来い……………と、無理に引きすつて

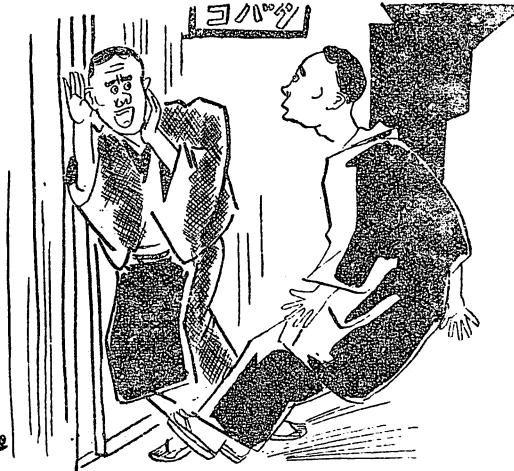
行きました。
働きたと、遊びの場所を失つて、今までよりも悲しい日を暮らしてゐる可哀想な子供……私の眼には、頬を打つ秋雨よりも猶、冷いものがにじみ出てゐました。

◆捕へてみれば……

空には星が二つ三つ、淡く、にぶい光りを投げてゐる。盛り場の芥箱を漁つたルンペンが曳く箱車のガタ、ゴトとさしむ音……、街は静かに眠つてゐる夜半の二時過ぎでした。

劇場で舞台稽古を済ました歸へり道……、私の家へ曲る角の煙草店、勝手口の戸が細目に閉いて、中から洩れる電燈の光りが、暗い夜路へ、太い線をひいてゐました。いつも此の店は早く寝る家ですし、今頃横の勝手口が開いてゐるのは不思議だと、私は犯罪を探し出す刑事のよふな氣になつて、そいつ

と戸口へ寄つて、隙間から中を覗きますと、内部の硝子戸に風呂敷包みを抱へた怪しい男の人影と、台所からその影に近寄る男が影繪のよふに映つてゐるのです。



るのです。
私はガタ／＼武者振ひをし乍ら、勝手口を塞いでク泥棒／＼と叫びました

その聲に、まだ寝てゐなかつた隣りの古本屋の主人が飛んで来て、

「もしツ、どないしなはつた……」

「へい、實は斯様こふ／＼で……」

クよふし……クとばかり身構へて、内部へ入りかけますと、今までシーンとしてゐた内らが、急にドタン、パタンの物音です……。強がつた古本屋の主人も、ちよつと尻りごみをする、内部から老人らしい人の激昂した聲で……。

「こらツ、己れ極道者、亦内の物を持ち出しやがつて、其處にゐる連れは誰れぢや、云はな警察へ……」

「云ひます／＼、連れは隣の古本屋の信ちやんだす……」

勢ひ込んで入りかけた古本屋の主人がクヘーツクと、後すさりして、思はず視線の合つた私の顔を睨みました。睨まれた私は、まるで、自分が泥棒でも

したよふに、後をも見ずに逃げ歸へりました。

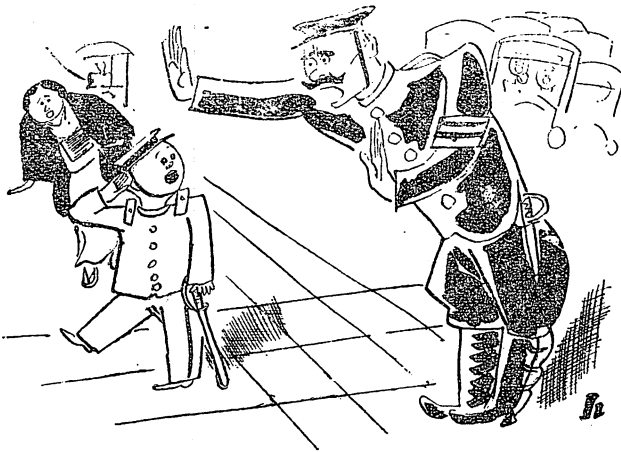
◆ゴーストツブ事件

秋晴れの暖い日曜……行樂の人々で溢濫する十字路、歩道から車道へ押し流されるやふな人の出盛り、然も四條河原町の交叉點での出來事……。

街角の鐵柱に凍つた眼のやふな光りを投げる四つの信號、赤……青の明滅……。

東西は赤で、車も人もビタリと止つて今や南北はまるで津波のやふに、電車自動車、人々が押し寄せやふとする瞬間、東側の人道から、陸軍少尉の正装も厳めしく、サーベルを秋の陽に燦と輝やかせて、西側へ平氣の平左で横斷しかけるのを見た交通巡査は、クあはーツ、危い〜クと、思はず大聲に叫ぶ、勢よく進みかけた電車も自動車も人も、ビタリと止つて、交叉點は少尉

殿の一人舞台……。にこ〜笑ひ乍ら立ち止つた少尉殿は振りかへつて、手招きをすると、年頃三十そこ〜の上



品な奥さんが、眞つ蒼白な顔をして駆け寄り、少尉殿を抱きあげて、

「まあー、お母ちゃんがお買ひ物をしてゐる間に、こんな處へ出て来て、もし怪我をしたらどうするんですの、お馬鹿さんねえ……。」
「うふん、電車も自動車も、みんな止るよつて、大丈夫や……。」

「まあー、此の子は……。」
奥さんは叱りもできず、少尉殿を抱いた儘で慌て、西側へ渡り、消へも入りたい程恐縮して、交通巡査に詫びますと、

「いやあ、怪我がなくて何によりでした。これから氣をつけて下さいよ……。」と、軽く受け流して、信號を續けてゐます。
少尉殿は眞面目な顔で巡査に敬禮をして、お母さんに手を曳かれて西へ……交叉點は此の騒ぎを忘れたやふに、青で進み、赤で止り、美しく朗らかに整理をされてゐました。

新興キネマ

独自の

問題篇



内務省警保局警視廳御後援
國策映畫第一作

警察官

竹田敏彦原作・相阪操一撮影
内田吐夢入社第一回監督作品

入社第一回主演

小杉 勇

特別出演

森 靜子

中野英治

桂 珠子

松本泰輔

總 出 動
外現代劇部

編輯後記

京の顔見世月をひかへて芝居街も何となく
 澁刺さを感じる。

今月は所謂大歌舞伎なるものは見うけられ
 ないが、「元祿忠臣蔵」を携て浪花座の舞臺
 へ登場した壽三郎を始めとする(一二の映
 入をも交へた)赫々たる歌舞伎の新鋭陣があ
 る。大阪歌舞伎の將來を囑望されたこれら
 の人々に、吾々は滿腔の期待をかけるものであ
 る。

× 中座は、いよ／＼その地歩を固めた家庭劇
 の歸演。文樂座の新人の活躍も是非御批判を
 願ひたきものである。

歌舞伎座は井上、藤村、水谷、歌舞伎方面
 より龜藏、友三郎、田之助。それに村田嘉久
 子、東日出子、米津佐喜子等の各派合同劇、
 何か新しい興味をそゝるものを感じる。

× 來月はいよ／＼京南座の吉例顔見世——顔
 見世特輯號として大いに活躍する考へてある

——滿彦生——

京阪電車鐵道線受託廣告一手取扱元

- 各種看板製作
- 立看板専門
- 鐵道構内 揭示
- 電車沿線 揭示
- 圖案印刷
- 裝飾
- 行列廣告
- 廣告雜役人夫
- ポスター 廣告
- チラシ 配布
- 廣告一般染物

廣 告 社

齋 部 德 多 郎 經 營

大阪南區御藏町九番地・電話三七五七番

南海・阪神・大軌受託廣告指定扱

昭和八年十一月一日發行
 月刊『道頓堀』第八八年
 雜誌『道頓堀』第八十六號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
 ◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひま
 す。
 ◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
 廣告の御用は電通または當編輯部廣告
 係へ御申越下さい。

一部金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和八年十月卅日印刷
 昭和八年十一月一日發行

大阪市南區難波新地三番町
 發行所 道頓堀編輯部
 發行所 鳥江 也
 共同編輯 山上 貞一
 印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町
 (大阪歌舞伎座内)
 松竹興行株式會社大阪支店
 發行所 道頓堀編輯部

見世特輯號として大いに活躍する考へてある
—満彦生—

く直今は方のり困おに臭防の

製創氏郎太彪林 士學



(定一價) 小瓶 五金 拾金 圓

アポロは、一ツの便所に數滴乃至十滴撒布すれば充分奏効します。又用便の度毎に一、二滴撒布すると結構です。小、人数の多少によつて分量の加減は是非必要です。アポロは不潔物から發生する惡臭を化學的變化により消臭します。從來の防臭劑(樟腦油、ナフタリン、クレゾール)等の如く藥の臭を以て防臭するものとは異ひます。又數倍の効力があります。

凡て惡臭の場所、便所、其他大抵の場所へ毎日十滴乃至十數滴づつ、場所の大小により多少の加減を要す。撒布すべし。但し一回に多量撒布するも却つて力効を減する場合があります。

印バタフ
劑臭脱
ロポア
れあ用使却非是

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

E X E

エキセ

特色

無刺戟
無痛
奏効迅速

陰囊疹特效新藥

(無脂肪性溶液)

エキセハ特ニ陰囊疹ニ對シ専門的ニ研究ヲナシ多年臨床實驗ヲ經タル新藥ニシテ從來ノ此種製劑ト同一視セラレザランコトヲ

{全國有名藥店及デパートに有} 定價三〇・五〇・一〇〇

元 賣 發

大 阪 市 東 區 榮 光 會 商 會
見 三 丁 目
伏 見 三 丁 目
三 三 三 三 三 三
電 話 替 換 處 本 局 三 三 三 三 三 三
電 話 替 換 處 本 局 三 三 三 三 三 三
番 五 一 一 一 一 一 一 一 一
番 七 一 一 一 一 一 一 一 一

ウ テ ナ

レモン

はなさ くに かんが うる 花咲く國の女は美はし

レモンが肌を養ひますから
レモンが色を白くしますから
レモンが肌理を細かくしますから
そのレモンから工夫した此のクリーム

果物の液汁の如きねばりがあつて肌は爽やかにヴァニシユします。つけたあと肌はレモンを輪切りにして摩すつたより美しくなります。キメ細かなレモンのやうな美しい肌を望む人に捧げます。白粉のツキは實に見事です。

